

Fate/Light Tune

炭団

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

写真好きなあなたに捧げます。

私立穂群原学園に通う、写真部の部長が主人公です。

まったくの一般人がカメラを通して聖杯戦争を知る。

戦闘シーンより、身近な怖さを書いていきます。

目次

1、	1月30日	1
2、	1月30日夜	7
3、	1月31日と2月1日	25
4、	2月2日	35
5、	2月3日から2月7日	43
6、	2月8日からエピローグ	50

1、1月30日

いつものように眠い目をこすりながら洗面所にフラフラと向かう。キッチンからコーヒーと祖父のふかすパイプの香りが漂ってくる。

「おはよう、杏子（きょうこ）」

「おはよう、お祖父ちゃん」

祖父がいてくれたコーヒーに口を付ける。昨夜の寝不足が堪えるなあ。わかっているのに夜ふかしがやめられない。

現在高2の私はそれなりに勉強はしているけれど、別に深夜ラジオがお友達の受験生ではない。原因は趣味だ。女の子には珍しいと思うけど、私はカメラ小僧ならぬカメラ少女であった。

「トースト、焼けたぞ」

「は〜い」

「また題材で悩んだのか?」

「いや、学園なんて題材の宝庫じゃない。ただ、身近にありふれちゃうのが良くないのかなあ」

「感覚が慣れてしまうって? 贅沢だなあ。学生時代なんて二度と帰って来んのだから、もつと目を凝らしなさい」

「だよね〜」

私立穂群原学園高校2年B組、出席番号35番三田村杏子、たった3人の写真部、そのの部長。それが私だった。ごくごく平凡に高校生活を謳歌し、私にカメラの事を指導してくれた、祖父の言うところの青春とやらを満喫している。

ただ年も明けた1月は行事も何もないからね。修学旅行に体育祭に文化祭、球技大会も全部終わっちゃったし、センター試験が近いから3年生もほとんど見掛けない。学園は今が一番閑散としていて動きがなかった。

外で艶やかな振り袖姿の人々を見掛けたのも先々週の月曜だ。今週で1月も終わろうというのに、ロクなものが撮れていない。いけないなあ。

もそもそと焼き上がったトーストを嚙る。とろりとろけるチーズ

を乗せるだけで、バターは塗らない。それが毎朝の私と祖父の朝食だ。

私は祖父との二人暮らしだが、両親も健在だ。家が学園から遠いと、一昨年前に祖母を亡くした祖父を励ます意味もあって一緒に暮らしているのだ。だから晩ごはんは日曜の朝昼晩は私が調理担当だ。高1の春から下宿しているので、料理の腕もまあ上がった。

私が学園に行っている間のお昼は祖父が自分で作るか、馴染みのお店で済ませている。年金暮らしだけれど新聞社の写真部で部長にまで昇り詰め、40年近く勤めていたので祖父は結構悠々自適だった。そしてもう一つここで暮らす理由。それは祖父の家に暗室があるからだ。

暗室とはフィルムを現像したり、印画紙に画像を焼き付け、それを現像したりする専用の部屋をいう。ライトボックスを置いてフィルムをチェックする作業机、焼き付けする引き伸ばし機、現像や水洗をする横長の広い流し。

広さはたぶん六畳くらい。奥行きは2mもない。作業順に配列された設備で幅だけが長い。きつと機材を測ってそこから設計したのだと思う。水回りの関係で暗室の裏がキッチンで、横が風呂場だ。1977年に東京本社からこちらにある支社へ転勤となった祖父が冬木に建てた家で、それまでは社宅と賃貸ばかりだったと父から聞いている。

この暗室には子供の頃から祖父と一緒に入っていた。薬品や酢酸の匂いと、現像バットの中でふわっと印画紙に浮かび上がるモノクロの画像は、私の中で祖父との思い出としてセットになっている。

その作業机でプルーフをチェックしていたら、ついつい時間を忘れてしまった。そんな事をここ数日繰り返している。

※プルーフ……密着写真のこと

「どうして今どき誰も口にしない青春なんて言葉を使ったかという  
と、光と影ってというのがあってしょう？ 私ってその影なんだよね。  
光の当たる場所で活躍するタイプじゃないのよ。活躍している人の

一瞬のキラメキ、あの瞬間を切り撮る裏方。黒子というか路傍の石なの」

「ああ、青春の光と影ってあるもんね。でも裏方って言うと、なんだかマネージャーっぽいね？」

本日2杯目のコーヒーは、入学以来の友である佐伯直美さんと一緒に緒した。

おっとりとした、おとなしい眼鏡の似合うおさげの女の子。だけど性格はともかく行動には快活な面もあり、クラブは陸上部で円盤投げをやっていたりする。何度も被写体になつてもらつた親友だ。そんな彼女は朝練後だった。

彼女は2年D組だけれど、1年のときは私と同じB組だった。そして現在陸上部のキャプテンをやっている。本来は毎度お騒がせな時寺楓さんが部長だったのだけれど、学園の配電盤か何かを壊して降格処分を受けたらしい。

佐伯さんもなりたくてなつたわけじゃないのでとても困っていた。それで何度か相談を受けていたのだ。

自称『穂群の黒豹』『穂群の陳宮』。それでなくとも濃いメンツの多いA組女子の中で、時寺さんは1と2を争う有名人でもある。ガサツで言葉遣いも乱雑だけれど、実家は江戸時代から続く冬木一の呉服店で、彼女自身が和装や和の付く建築物や骨董品、陶器などの焼き物に詳しい。それもちょっと生半可ではない知識量だ。おまけに和食の調理もかなり上手だとか。けれど走っている姿は素晴らしく絵になる。短距離走の人なのだが、ストライドが本当に綺麗だ。

同じA組で、走り高跳びの氷室鐘さんやマネージャーの三枝由紀香さんとは親友同士ですごく仲が良い。その三枝さんと私が似ていると佐伯さんは言ったのだ。

見た目じゃなく立場というか、行動を指しての事とは理解できる。けれど三枝さんは路傍の石ではないんだよなあ。彼女は縁の下の力持ちだ。どれだけ頑張っているか。私のファインダーはその頑張りを見逃していない。

そしてこのA組には、おそらく学園で知らぬ者はいないであろう超

有名人が在籍している。その名は遠坂凜さん。品行方正・文武両道・容姿端麗、文化祭のミス穂群原コンテストで2年連続優勝した人だ。だけど四重にも五重にも、苦労を『進んで背負っていく』、とても奇特な人だと私は思う。なんで自分から……？

見ているいつもそこが不思議なのだけど、どうやら彼女なりの理由があるらしかった。まず、彼女は天涯孤独だ。大地主で資産もあるので生活は大丈夫みたいだけど、親類との交流もなく、新都にある教会の神父さんと交流がある程度で、彼女の家を訪れた人は学園にだれも居ないらしい。

そんなだから、どこか無理して背伸びをしている。無理をして優雅に振る舞っているってわかるのだ。

だから私の目がとらえる彼女の表情は、いつも曇っている。もちろん、そんな場面でシャツターは押さない。困った顔、泣きそうな顔、辛そうな顔。おそらく誰も知らない顔を私は知っていた。

一番顕著なのは、1年生の間桐桜さんを見ているときだ。あれが一番あからさまだろう。間桐さんは弓道部員で、その部長が2年A組の美綴綾子さんのだけけれど、一応美綴さんと遠坂さんは親友という事になっている。

そこにかこつけて遠坂さんは、よく弓道部に見学へ行く。だけど本当の理由は『公にできない妹さん』に会うためだ。骨格に肉の付き方などをどうこう言わずとも、間桐さんの写真にマジックでツーサイドアップを描けば瓜二つだった。

確かに遠坂さんは日本人離れした細面だからわかりにくい面もあるけれど、私みたいに何年も写真を撮っていたらわかってしまう。当然詮索はしないけれど、きつと何か理由があつて養子に出たのだろう。

けれどあのPTA会長の家には、ちゃんと長男が居るのだ。2年C組の間桐慎二君だ。顔はイケメンだけれど、性格は自己中で傲慢。世間知らずなボンボンだって、同じ高校生ならわかる。いや中学生でも2年生以上になると、上辺だけの見栄っ張りで苦労知らずのバカだつてわかるだろう。

だからなのかなあ。養子を迎えるって事は、間桐君に相当問題があるのかも。長男なのに慎二という名も不思議だよ。それと思いつかぶもう一つの理由は、女の子でなければ継承できない何かがあるからかも。勝手な想像だけどね。

でも……もしそうだとしたら、それは一体何だろう？ そんな事を考えながら、下足室で上履きに履き替え教室に向かった。

すると階段の踊り場で生徒会長の柳洞一成君と遠坂さんが言い争っていた。生徒会室横のこの階段は人通りが少ないので、これまでに何度か見掛けた光景だ。

柳洞君も文武両道で成績が良い。それと結構イケてるマスクをしている。ああやって並ぶと、遠坂さんとタメを張れる数少ない男性に思える。それで実際この二人、並んでいた時期があった。要は同じ中学出身で、同じ生徒会役員だったのだ。そこで派手に言い争いになり、それ以来犬猿の仲だと聞いている。ただし、お互いの能力や立場なんかは認めている様子が伺える。

なのに今日はちよつと感情的だ。遠坂さんの一見完璧に見える仮面も、こういうときには剥がれてしまう。反論も良いけれど、もう少し自分をコントロールできないものかな？

「終わったぞ、一成」

ガラスと扉が開き、生徒会室から衛宮士郎君が出て来た。彼は生徒会長の柳洞君や、間桐君と同じ2年C組で、『偽用務員』や『ばかスパナ』、『ばかしゃもじ』、あるいは『無償奉仕大好き族』と好き放題言われている。『ブラウニー』なら可愛い方だけど、裏にある真意は『お人好しな便利屋』だ。

今まで何人もの人から、そんな事までしなくていいと言われていたのに、それでも自分から他人の雑用を進んで手伝うか請け負っている。そして朴訥で口数が少ない。それも裏返せば、ぶつきら棒で愛想が良くないという意味だ。

なので友人が離れていく。弓道部のエースだったのに辞めてしまったので、ますます友人離れに拍車が掛かっていた。この奇妙な行動には理由があつて、彼の小学校時代の卒業文集にその手掛かりと言



うか、答えが書かれてある。それは『正義の味方になりたい』だった。彼は憶えていないだろうけれど、実は私と彼は同じ小学校出身で2年生と5・6年生は同じクラスだったのだ。だけど私は卒業後、両親の仕事の都合もあって冬木を出てしまい、引越した他市で中学に通っていた。これが私の友人が少ない理由なのだが、面白いことにそんな環境が私の観察眼をどんどん培ってくれた。お蔭で人間観察がなかば趣味みたいになってしまっている。そしてそれが子供の頃から祖父に教わって始めた、写真に大いに役立ったのだ。

だからだろう。衛宮君の奇妙なあり方や言動がサバイバーズ・ギルトだと直ぐに気付けた。まあ、これは彼が10年前の大災害の数少ない生存者で、彼の養父が危険な場所から彼を救って引き取ったという事実を知っていたからだが。

彼自身は誰彼構わず自分の事を人に話すタイプではないけれど、父は新聞記者だし、祖父も元新聞社のカメラマンだ。情報は簡単に手に入った。そしてその情報に奇妙な虫食いと、おかしな点があることも気付いていた。

危険な場所から救けたからと、そう簡単に養子縁組が男親だけの家と結べるのか？ そもそも彼には他市や他県に親族は居なかったのか？ などだ。

だけどそれは私がどうこう考える事ではない。目下の私はフォトジェニツクな被写体を真剣に探していて、人の事にかまっている暇などないからだ。

冬木市主催の写真展は年に2回ある。毎年3月と9月だ。その春の写真展に応募するのが写真部の目標であった。

「おはよう、衛宮君」

「おはよう、三田村」

「……あっち、階段の下。会長が」

「うん？ 一成と……ええ？ 遠坂とか……。悪い」

衛宮君が出て来た事を察したのか、口論はすんなり終わった。なので私は衛宮君に後を託して教室に入った。それが1月30日だった。

## 2、1月30日夜

「杏子。人ばかりでなく、たまには自然な風景でも狙ってみないか？」

祖父にそう提案されたのは夕ごはんの支度を終えた頃だった。そうだなあ。気分転換にはなるか。

「それでどうするの？」

「天体写真だよ」

「天体写真？」

「うむ。三脚を立ててな。赤道儀で星を追っても良いし、カメラを固定して星を流しても面白いぞ。どうだ、やってみないか？」

へえ。面白そうだ。それで話は進み、食後にクルマで撮影スポットまで行くことに決まった。

私はE○S—10Dに50mm/F1.8Ⅱを着け、お父さんから譲られたニューFM2に、祖父から……いや、お父さんと言ってしまったから、ここからはお祖父ちゃんだ。そのお祖父ちゃんから戴いたニツ○ールHCオートの28mm/F3.5を着けた。

このニツ○ールCオート・シリーズは、それまでのニツ○ールオート・シリーズがマルチコートされたタイプで、旧連動式のツメが塞がっていてレンコンのようなピントリング（ローレット）が着いているのが特徴だ。

なんで今の女子高生がこんな古いレンズを使うのか？ それには理由がある。お祖父ちゃんやお父さんの影響はもちろんだけど、義務というか責務というか、そういうのもあったりするのだ。

少しお祖父ちゃんの事を話そう。元報道カメラマンだったお祖父ちゃんは、仕事で嫌な写真を撮る事が多かったからか、趣味の写真にはとことんこだわった。同僚が家ではカメラを触らないという中で、次から次へとレンズやカメラを買い揃え、お祖母ちゃんを泣かせていたそうだ。

だけどその御蔭で写真を嫌いにならずに済み、今もこうして趣味として続けられているんだと話している。だから病気で死んじやった

お婆ちゃんのお壇に毎朝ありがとう、手を合わせるのがお祖父ちゃんの日課だった。

そんなお祖父ちゃんのお機はニオンFのフォトミックFTnとF2のフォトミックASである。知らない人は知らないだろうが、知っている人からすれば日本のカメラ史に燦然と輝く名機中の銘機だ。

だけど新聞社に務め始めた新人の頃はフォトミックじゃない、ただのFだったそう。それは写真部に転がっていたもので、ベテランや先輩は当時最新のFフォトミックだった。それを横目で眺め、羨ましかったという。

けれど新卒で入社した翌年に東京オリピックが開催され、そこで初めてFフォトミックを与えられたそう。フォトミックとは交換式のペンタプリズム部分に外光式露出計が付いたタイプをいう。つまり後からこの部分だけ買って、FをFフォトミックにできるのだ。

もつと言えば、こうだ――。

ノーマルF↓誰しもが一眼レフで思い浮かべる、三角形に尖ったアイレベル・ファインダーが付いたもの。

Fフォトミック↓その尖ったペンタプリズムが、露出計付きになったもの。正面から見て左側に丸い測光部分がある。

FフォトミックT↓同じペンタプリズムなら、そこをもつと利用しましょうとTTL平均測光となったもの。TTLはスルー・ザ・レンズの略で、レンズから入る自分が取りたいと思った対象そのものの光加減を測るという意味だ。たぶんこの辺りまでが前期型。

FフォトミックTn↓測光形式が平均測光から中央重点測光となったもの。

FフォトミックFTn↓Tnの改良版。絞りが露出計と連動するようにになった。それまではレンズごとに手動で開放値を設定しなければならなかったのだ。レンズの鏡胴根本にあるツメをF5.6に合わせ、絞りを最小から開放に向かってガチャガチャするのはここから始まった。廉価版のニコオートFTnにも同じ機構が入っている。

そしてたぶんここからが中期型で、軍艦部の刻印が富士山型からアルファベットの社名になった。後期型はフィルム巻き上げレバーに

ゴムのカバーが付いているので一発でわかる。

これがF2だとこうなる――。

F2↓アイレベル・ファインダーDE―1が付いたタイプ。露出計が要らなければ、電池も不要で一番安心。

F2フォトミック↓フォトミックファインダーDP―1付き。FフォトミックFTnと同じ機構。

F2フォトミックS↓フォトミックファインダーDP―2付き。露出計の指針がLEDになった。

F2フォトミックSB↓フォトミックファインダーDP―3付き。露出計の受光素子がCdSからSPDのなった。

F2フォトミックA↓フォトミックファインダーDP―1付き。Ai方式になってガチャガチャが必要なくなった。だけど露出計の受光素子はCdS。

F2フォトミックAS↓フォトミックファインダーDP―12付き。Ai方式。露出計の受光素子はSPD。

お祖父ちゃんはASの前にDP―1のF2フォトミックを持っていた。それは現在私のオモチャとなっている。お父さんも中古で程度のいいF2フォトミックASを買っていて、MD―2モータードライブを着けて大切にしまっている。そして二人とも必ずボディに黒を選んでいた。これは黒がプロの証だという昔の考えがあるからだ。

その後、Fはアポロとともに宇宙へ行き、F2は植村さんと北極へ行った。私は小さい頃、植村さんを宇宙飛行士だと勘違いしていた。それくらいFやF2の神話を聞かされて育ったのだ。

マニュアルフォーカスで、露出計の性能もまだまだだった時代のカメラ。オリソピックではそんなFに300mmや500mmの望遠レンズを着けて、何枚も何枚も撮ったという。選手たちが魅せる躍動と感動、観客の興奮、そしてお祖父ちゃん自身の興奮。リリースボタンを押す指先が震えたそう。そりやそうだろうね。

けれど3日目、4日目と進むうちに指の震えが止まったそう。オリソピックが終わって、同じ新聞社が発行するグラフィ誌に、お祖父ちゃんの撮った写真が掲載された。ここからお祖父ちゃんのカメラ

マン人生が本当の意味で始まったのだ。

務めて5年目になろうかという年に、フォトミックTnが出たのだけれど、結婚3年目でお金がなくて、泣く泣く我慢したそうさ。だけどその翌年にFTnが出て、ボーナスをお祖母ちゃんに預けず、その足でカメラ店に入っちゃった。そのせいで、3歳のお父さんの保育園の月謝や、借りていた部屋の家賃すら事欠くありさまだったと言う。

普通に考えたらクズだ。けれどお祖父ちゃんはお酒は嗜む程度だし、博打もしないし浮気もしない。いわゆる『呑む・打つ・買う』などを一切しない人だった。だからお祖母ちゃんのお父さん、つまりひいお祖父ちゃんが写真一筋のお祖父ちゃんを応援して、何度も生活費の面倒をみてくれたと話してくれた。

だからお祖父ちゃんはカメラをととても大切にしていた、毎日毎日磨いている。お父さんの幼児期から小学生時代の写真はみんなこの『F』で撮られている。

お父さんも子供の頃から写真を学ばされ、中古のFを与えられていた。それが今もあるのだけれど、まず持てば誰しもがこう思うはずだ。『重い』と。そしてフィルム交換。裏蓋が横に開かない。底にあるキーを回せば裏蓋込みで下側がガコツと外れるのだ。こんなので迅速な交換なんて出来ない。

なので新聞社の人はF36モータードライブを取り付けた『F』を2〜3台肩にかけるか、長巻のフィルムをそのまま納める専用マガジンを装着した。

また、こんな変なマガジンを付けるからあそこにあるのかというくらい、シャッターボタンの位置も変だ。カメラの上部分を軍艦部と言うのだけれど、『F』はその前寄りではなく後ろ寄りにリリースボタンがあるのだ。なんでも『F』の前のカメラと同じ位置らしい。だけどその分小学生には押しやすいので、お父さんは好きだったと話していた。

その後少しずつ昇給し、次の『F2』は計画的に買ったそうさ。買い替えたクルマのローンに組み込んだ、みたいな事を亡くなったお祖母ちゃんが話していたとお母さんは言っていた。

クルマは昔からジム〇ーで、今が三台目だったと思う。シエラという1300ccだ。最初のは軽自動車で助手席はお婆ちゃん以外禁止で、お父さんも座ったことがなかったという。今は私が横に乗るの  
で、お父さんも少し驚いていた。

そんな筋金入りのニ〇ン党だから、お祖父ちゃんはこのCオート・シリーズの世代と次の世代のニューニツ〇ールのレンズをたくさん持っている。『F』の時代のニツ〇ールオートなんて貧乏時代だったからほとんどない。だけどサードパーティ製やキ〇ノンのスピゴットマウントだった頃のFDレンズなんかはちらほらある。一時、キ〇ノンを触っていた頃もあったようだ。

お祖母ちゃん一筋だったお祖父ちゃん曰く――。

『カメラは浮気しても文句を言わないからな。何よりどう違うのか知りたいじゃないか』

そういう例えは理解できてしまうから、ヤメて欲しい。

ともあれ昔は単焦点が当たり前だった。そんな頃、カメラ雑誌の特集でよく組まれたのが『初心者が最初に選ぶレンズ』『最初の交換レンズ』などだ。そしてボディとセットで販売され、メーカーが標準と謳うのが、焦点距離50mm近辺のいわゆる『標準レンズ』だった。

では2本目は？

スナップでは非とも欲しいのが35mmだ。誰でも扱いやすく、フ  
レームの収まりが良い。だからコンパクトカメラの焦点距離もこの  
35mm辺りが多いのだ。

では、それでも物足りなくなつて、もっとワイドが欲しくなれば？  
そこで二つの選択肢が生まれる。24mmか28mmかだ。する  
とこんなレンズの揃え方になる。

24mm↓35mm↓50mm↓85mm↓135mm

28mm↓35mm↓50mm↓100mm↓200mm

勿論24mmを選んでも50mmの後は100mmを選んでも良いし、  
28mmで85mmを選んでも良い。広角側か望遠側にズーム・レン  
ズを選んでも良い。それはその人の好みだ。

そしてキ〇ノンはこの24mmに強いらしく、三種類も揃えていた

時代があった。特殊なレンズを含めるともつとだ。対するニ〇ンは28mmと100mmならぬ105mmが強かった。

そんなカメラ・メーカーのレンズは時代の変遷とともに、システムチックにどんどんとそのラインアップを増やしていった。

先程も言ったが、大きなメーカーは得意な焦点距離ではF値の明るい高級なレンズと、中間くらいのレンズ、暗いけれどシャープな入門用レンズをカタログに載せるようになっていた。

それが家にある古いニ〇ンなら、ニツ〇ールHCオートの28mm / F3.5とニツ〇ールHCオートの50mm / F2.0、そしてニツ〇ールQCオートの135mm / F3.5の三本だった。つまりこの上にもっと明るいレンズが二つ以上あるという事だ。どれもニ〇ンのサービスタワーでAi対応に改造してある。

学生時代のお父さんも、このレンズで練習していたという。縁や指のよく触れる部分は塗装が剥がれて、下地の金属が光っている。そんなあちこち剥げたレンズは、親子三代に渡る歴史を刻んだ私の宝だ。

そしてこのような格安の入門レンズは最後のマニュアルフォーカス・システムだった、Ai Sニツ〇ールまで生き残っていた。お父さんはそのAi Sニツ〇ールでレンズを揃えていたので、入門用に使いそうなレンズとボディは孫に譲ると話している。お祖父ちゃんも曾孫に全部譲ると話しているので、一人っ子の私は責任重大だ。

けれど実際はニツ〇ールHCオートの50mm / F2.0や135mm / F3.5なんてほとんど使わない。まずニ〇ンと言えばマイクロの105mmだ。写真部の備品にも同じのがあるが、むちゃくちゃシャープなレンズだ。お年玉を貯めて中古で買った。

敢えて言うならF4.0と暗いのが難点かな？ 今はF2.8もあるけれど、何か違うような気がする。ボケ味はキレイなんだけど。

お父さんから借りっぱのAi Micro ニツ〇ール 55mm / F2.8や、お祖父ちゃんの家のカメラ・ケースに転がっていたタム〇ンのSP90mm / F2.5 (52B) なんかも断然出番が多い。

歴代のSP90はプロに愛される名レンズだ。お祖父ちゃんも、お

父さんも新しいのに次々と買い替えていた。だから昔のが余っていたのだろう。

ただ、絞りの方向は良いけれど、ニ〇ンだとフォーカスリングの無限方向が逆なんだよね。キ〇ノン派なら絞りだけが逆になる。目で追わず指先と言うか皮膚感覚で覚えていると、これが中々慣れない。シグ〇やト〇ナーだと同じだから違和感があまりないんだけど。それでもシグ〇のズームは広角と望遠が、逆回転の物が時々あって悩むとお祖父ちゃんは話していた。

そんな事もあつて今年度の体育祭では、これまた除湿機能付きカメラケースの奥で眠っていた、シグ〇のミラー・テレフォト 400mm/F5.6が大活躍した。同時に見付けたタム〇ンのSP350mm/F5.6と並んで、何故これがあるのか謎のレンズだ。

どちらかがお祖父ちゃんなので、どちらかがお父さんのらしいけれど。でもこんな手頃な焦点距離のレフレックスレンズなのに、全然売れなかったらしい。かなり希少性の高いレンズなのだ。500mmならたま〜にカメラ雑誌の懐古特集で見られるけれど、これもF8.0と暗いので普通の人はまず使わない珍しいレンズだ。なのに家には3〜4本ある。

独特のリングボケは汚いと言われるし、凹面鏡の反射を利用しているので、どこかピントが甘く芯がないとも言われる。だけどカラーでなくモノクロだと、とても味がある。特にポートレートなどで接近すると、被写体の後ろのボケが独自の世界を醸し出す。

こんな風に使いたいどころでいくらでも楽しめる、往年の隠れた名レンズや名機が打ち捨てられて行く。デジタル時代を迎えて、そんな風な時代が代わってしまった。

お祖父ちゃんのお友達からアナログ・カメラを戴いたこともあった。

フ〇のフ〇カGS645WプロフェッショナルやGS645SPロフェッショナル、それにフ〇カGM670プロフェッショナルなどの中型カメラに、ペンタ〇クスのMXやキ〇ノンのAE-1などの一眼レフだ。それぞれ交換レンズ数本付きで戴いたので嬉しかった。



特にGM670は50mm/F5.6と65mm/F5.6がセットだったので中型カメラの練習に持って来いだった。どうしてこれを私に下さったのか、今だに信じられない。

MXはSMCペンタックスMの40mm/F2.8と、Mじゃない24mm/F3.5にソフトの85mm/F2.2。これにキヨハラソフトのベス単、VK50R(50mm/F4.5)までがあつたから何を撮りたい人だったのか明確だ。

AE-1は50mm/F1.8S.C.付きだった。これ以外のレンズがないところが潔いというか何というか。全然使つていなかったのか、ほとんどタイムカプセル品だった。お祖父ちゃんからスピゴットのFDレンズを借りて時々使っているけれど、キ〇ノンはカラーでのポートレート向きだ。人肌がとても綺麗に写る。

ミノ〇タのSR-T Superや、輸出用だったというハイマチック7sIIに、二眼レフのヤ〇カマツト124Gなども別の方から戴いた。

一眼レフのSR-TはFに通ずる金属の塊だ。101と並んで当時のパパさんはこぞって買ったという名品だ。

驚きはハイマチック7sIIだ。お祖父ちゃんもお父さんも、プロは黒だと言わんばかりに黒ボディばかり揃えていた。そしてこのチビっこい距離計連動式カメラも、ファミリー向けと思えば珍しい黒なのだった。おまけにシャッター速度優先AEの他にマニュアルがある。

一般家庭用でこれは珍しい。だけど下さった方は、これの10年前に販売されていたハイマチック7sやハイマチック9にもマニュアルがあつたし、その輸出用にも黒があつたと教えて下さった。

この7sIIのロツ〇ール40mm/F1.7はとても味があるし、マニュアルが使えるのが本当に良い。世の人は皆んな露出に迷う。そこでシャッター速度優先AEや絞り優先AE、プログラムAEなどが生まれたわけだけど、誰しもがそういうのが欲しいわけではない。お手軽で安くて、でも基本性能はしっかり、そういうのが欲しい人も居るのだ。だから輸出用だったんだろうなあ。

だって当時はコ○カのC35シリーズが大ヒットしていたからだ。『じゃ〜にくコ○カ』『ジャスピッコ○カ』『ピツカリコ○カ』なんて普通の女子高生は知らないだろうけど、お父さん世代の人は子供の頃C Mで見たと口を揃える。だけどC35はどれもこれもA E専用機でマニュアルがなかった。シャッタースピードもレンズシャッターなので高速がなく、中途半端だ。言ってみればカラーネガフィルムの、ラチチュードに頼った設計だったのだ。

これはライバル機のオリ○パス・トリップも同じで、他のメーカーも全部何らかのA E専用だった。これならピント目測式でもシャッターや絞りが自分で決められる、コーワSWのようなカメラのほうが断然面白い。

対する7s IIは、シャッター速度優先A Eこそあれど、上手い人以外はお断りな部分がある。そこが私の好みとマッチしていて好きなのだ。これをぶら下げて歩くと、すれ違うお年寄りが『おっ』という顔をする。話しかけて下さる人までいる。そこからカメラ談義が始まる事もしばしばだ。

同じような効果を望めるのが、ヤ○カマツト124Gだ。二眼レフだよ？ 二眼レフ。私みたいな若輩者が7s IIでなくラ○カのM3やM6をぶら下げていたら生意気だ。それと同じくロー○イフレックスの2・8Fや2・8FXなんかを持って散歩していたら顰蹙モノだろう。

そうとなると、この124Gは良い。『ああ、祖父か誰かのカメラを大切に使っているんだな』と、好意的に見られるからだ。ミノ○タ・オートコードには負けるけれど、鉄板プレスのリ○ー・フレックスよりは高級感がある。

気に入った景色を見付けければ、上面のフードを広げて覗き、ルーペでピントを合わせてパシャッと撮る。スクリーンに写る像は左右逆だけれど、6×6のスクウェアなフレームは余りにも新鮮だ。だって画面が正方形のテレビや映画なんてこの世にないんだから。

帰りがけに喫茶店に入って、テーブルの上におもむろに124Gを置く。高い確率で誰かが話しかけてくれる。そういう世代を越えた

コミュニケーションを生み出すカメラ。それが124Gであり7s IIなのだった。

断言しちゃうけれど、写真は腕よりコミュニケーションだ。コミュニケーションを上手くとれない人は写真に向いていない。これは対象が静物であったとしても同じだ。それを世に出すには、コミュニケーションが絶対に必要なのだ。もつとわかりやすく言えば営業能力であり、トーク力だ。それが無い人はプロにはなれないし、いい写真も撮れない。まして人物撮影主体ならなおさらだ。

人の『喜怒哀楽』、その『喜』と『楽』を引き出してこそその腕だと思う。自分の『怒』や『哀』が写った写真を、誰が欲しがるの？ 誰が見たいと思うの？

それが絵になるとか、その人を現しているとか、真実だというカメラマンは自分の嘘っぱちのエゴを押し付ける二流だとお祖父ちゃんは断言していた。私もそう思う。人々にプラス方向の感動を与える写真、それが真実であり、それを追い求めるのがカメラマンだとも教えてくれた。

そんなお祖父ちゃんに共感し、友人となってくれた人達。皆さんお年を召されて、それまでの機材を手放し、単焦点高級コンパクトやデジタルカメラに移行された。私はその恩恵を一身に受けているわけだけれど、悲しいと言うか寂しいと言うか。

お祖父ちゃんの血を引いてこだわり屋さんでカメラ好きなお父さんも、仕事では会社から押し付けられたEOS-1Dsばかりだという。

記者は記事を書くだけではない。自分の足で情報を集め、自分で撮影する場合も多い。ましてや今のデジタル時代だと、写真部の人でも記事を書かされるそう。今や暗室は物置となり、明室でパソコン相手に画像チェックして、記事をエディターで打ち込む。それをメールで編集部を担当デスクに送る。そんな時代なのだ。

長いこと仕事でもプライベートでもF3やF4を愛用していたのに、時代はデジタルという社の方針で一斉にキノンへ代わった。最初は戸惑ったそうだけれど、最近は慣れてきたとお父さんという。若

い頃からF3、FM、FM2、ニューFM2、ニューFM2チタン、FE、FE2、FAと揃えてきたマニュアル派のカメラ小僧だったお父さんがよくぞと感心する。

でも、内心では不安だったのだろう。若い間にデジタルにも慣れなさいと言ってきた、最初の10Dは半額というか2/3も、お祖父ちゃんとお父さんが応援してくれたのだ。お蔭でバッテリーグリップのBG-E D3とセットで買えた。けど、20Dなどの後継機種が出たらすぐに買い替えるつもりだ。持論だけれど、デジタルは最新のものでないと意味というか価値が半減すると思う。だって新しくれば新しいほど新機能と画素数が増えるからだ。

その事をお祖父ちゃんに話したらとても訝しんだ。そこで私はこう説明したのだ。私が思うデジタルの良さとは、お手軽なところと、CCフィルターやLBフィルターが、最初から全色内蔵されているも同然なところだと思うと。

私はお祖父ちゃんやお父さんの手ほどもあって、基本完全マニュアル派だった。シャッタースピードも絞りも、デジタルなら感度も色温度も自分で決めていた。内蔵露出計は参考になっているだけだ。オートで体育祭なんて撮れない。照り返しで白く照り返すグラウンドに、白い体操服の学生たちを撮ろうと思えば露出補正が追いつかないのだ。

それに写真部はグラウンドのあちこちに行かなければならない。つまり順光も逆光も何でもありなのだ。そんなので、ここはプラス1とかプラス2とかやってみられない。それなら、自分の撮影ポジションで手の甲を測り、その露出でマニュアルにしてしまうほうが確実だ。つまり何としてでも18パーセント・グレーにしてしまう内蔵露出計の機能を逆手に取って、全画面を自分の手の甲にしてそれを基準にしてしまうのだ

デジタルだと更に色温度だ。今日はピーカンなので5500ケルビン。でも少し青寄りのほうがシャープに見えるので5300ケルビン。もっと性能が上がれば別だけど、オートホワイトバランスは使わない。お日様マークや日陰マーク、曇りマークに電球や蛍光灯。こ

の中で役に立つのは蛍光灯だ。昼光色は6500ケルビン、昼白色は5000ケルビン、白色は4200ケルビンくらいとわかっていても、緑色の成分が多いのでマニュアルで決めづらいのだ。

逆に考えて、太陽光が直射でなく間接的に大きく入るビルの玄関フロアなんかでモデル撮影するなら、敢えて電球にしてしまつて青く撮る場合もある。要は何をどう表現したいのかだ。

ISO400なら1/500でF8.0、人物を止めたいので1/1000でF5.6。半逆光なら絞りをF4.0、完全逆光ならシャッタースピードも1段落とす。こういうのを身体が覚えるまで、何度も何度も繰り返し撮影するのだ。

勿論それ以前の基本的な技術も必要だ。脇の締まったブレない構え方、指先でなく指の腹でそつと押すブレないリリース、瞬時に決めなきやならないフレーミングと露出……。露出つて写真を撮る上で、数多くある要素の一つでしかないのだ。そして決定的瞬間を確実にものにする、運とカンとセンス。これらを毎日毎日、心のシャッターを押すことで磨くのだ。要はイメージトレーニングなんだけどもね。

そんな私に妙なオートや測光機能は要らない。アナログカメラなら正確なシャッターと絞り、自分の感覚と合うリリースがあれば良い。デジカメなら色温度や色調にホワイトバランス補正などの各種補正と、現像パラメーター（後のピクチャースタイルやピクチャーコントロール）などの、表現の幅を広げてくれるJPEG圧縮エンジンがあればそれで良い。それ以外の機能は、言ってみれば余分なモノだ。

ストロボ発光禁止モードも内蔵ストロボを使わないので必要ない。夜景ポートレートなんて絞りを開けてシャッターをスローにして、外付けストロボをスローシンクロさせるだけだ。ただボケ味優先で単眼を使うと、TTLでも絞りが足りなくなる場合がある。この時はガイドナンバーの低い内蔵ストロボを使う場合もある。

その次のスポーツ・モード、クローズアップ・モード、風景モード、ポートレート・モード、全自動プログラム・モード(□)、プログラム・モード(P)、シャッタースピード優先・モード(Tv)に、A-DE

Pモード（被写界深度優先）も使わない。絞り優先・モード（AV）かマニュアル・モード（M）以外使った試しがない。

だけど全否定はしない。オートフォーカスは老眼や近眼で悩む人を救った。組み込まれるマイコンの恩恵は、逆光の日中シンクロや夜景シンクロを、純正ストロボとの連携に拠ってより確かで高度なものとした。これらアナログ時代の財産が、今のデジタルカメラを更に高度なものへ進化させるのは目に見えているからだ。

最早カメラは写真機でなく、外部へ持ち出せる3Dスキャナーだ。あのお手軽さは大きな機動力となる。ISO感度の上限はますます上がり、シャッター速度も早くなり、手ブレを補正する機能や、撮影者の視線や被写体の目の位置を読み取ったりする機能が盛り込まれて行くのだろう。

そしてそうやって撮った画像をパソコンで管理し、レタタッチソフトで加工し、作品に仕上げて行く。出来上がりは全部パス付きアップローダーかメールだ。そんな時代がもう来ている。速報性と状況描写の観点から、今後はデジタル・ビデオカメラも撮り慣れないとなあ。

こんな風に考えているからか、もつとお手頃でお気楽なデジタル・コンパクトカメラにも、早くからアンテナを立てていた。最初に気に入ったのはIXYデジタル。アナログ時代のAPS規格には懐疑的だけれど、あの小ささと質感、そしてメカメカしいデザインは好みだった。それで中2のときに、町内会の旅行で使えるお気楽なデジタルを探していたお祖父ちゃんにお薦めしたのだ。お祖父ちゃんもそこからハマったらしく、翌々年にはIXYデジタル300aを買い、昨年は400を買っていた。そうして初代IXYデジタルは私のものとなり、修学旅行に持って行けたのだ。

けれど初代で定価7万4800円だ。2年後の300aも驚きだが、続けての400はさすがに呆れる。

『だってお前を預かる事で、毎月恭司から3万振り込まれるからな』  
それ、私の生活費じゃないのか？

『食費もお前のお小遣いも、インターネット回線も私のお金だぞ？』  
洋服もお願いすれば買ってくれるお祖父ちゃん。逆らえないよ。

そんなデジタルにアレルギーのない私だけれど、意外にもRAW現像はまずしない。マニュアル露出に慣れていて、露出に迷わず、なおかつ色温度・色調・ホワイトバランス、そしてJPEG圧縮エンジンの補正が使いこなせるなら、RAWは時間の無駄であり、余計なデータ量を必要とする悪機能だ。

勿論、ケース・バイ・ケースなので撮影内容に拠るのはわかっている。だけど新聞部に回す画像や、生徒会から依頼されたものは、すぐさま使わなければならないケースばかりなのだ。そこでこういう撮影方法になつてしまうのだ。

とは言え、デジタルはそういう補正機能が多いので、とてもカラー撮影に向いていると思う。だから私はデジタルだとカラーでしか撮らない。

逆にアナログはY・O・R・Gなどの白黒用フィルターを使つて、昔ながらのフィルムを使うほうが味が出ると思う。何より古いニッコールはレンズが黄色み掛かっているのか、素でもコントラストが高い。報道向け、新聞向けと言われるのは、システムの充実度だけでなくそこもあったと思う。悔しいけれどキ○ノンはマゼンダ掛かるので、カラーの人物撮影にとても向いている。ファッションなどのモデル撮影に多く使われるのはそういう事だ。

CFカードは1GBを2枚持っている。これで何カット撮れるのかな？　ところがフィルムは多くとも36枚ごとに巻き戻して取り替えないといけない。不便といえば不便だ。

なのでフィルムは、長巻の100フィート缶でネ○パンの1600と400を、自分で詰めて使っている。だからフィルム・ローダーは二つ持っていた。これを36枚撮りにせず、30枚撮りにして詰替えるパトローネに巻くのが私のスタイルだ。そうすると四切でなく六切でコンタクトシートが作れるのだ。

愛用の三脚は、スリ○クのフリーター雲台が付いたマスター三段。たぶん1970年代の製品だ。お祖父ちゃんが昔つかって使っていた、黒い塗装の表面がザラザラした古い古い三脚。それをカーボンの脚と梅本のスーパーロック自由雲台に替えたので戴いたのだ。

その戴き物のマスター三段にクイックシューを付け背中に背負い、肩にはカメラやレンズを詰め込んだド○ケのF―2だ。テ○バのP―595も持っているが、1年生の夏にスカートがとんでもないダメージを食らってしまってF―2に替えたのだ。テ○バの上位モデルは防弾ベスト用の生地で出来ており、耐久性は折り紙付きだけれど、衣類を削るという恐ろしい面がある。

その予防として背面側に別の布地があるんだけど、角の部分にそれはない。その時たまたま掛け方が悪かったのか、制服のスカートをボロボロにしちゃったのだ。

ともあれ晚ごはんを終えると、お祖父ちゃんと一緒に出発した。場所は柳洞寺だった。長い長い石段前にクルマを停めて、真ん中辺りにある踊り場で三脚を立てた。ここだと外灯はないし、深山町や新都の灯りも樹々に遮られて夜空が綺麗に写るのだ。

「杏子、フィッシュアイレンズを貸してあげるから、そちらでも撮ってごらん」

「うん、ありがとう」

1月末の寒空の下。祖父と二人で天体撮影。私は幸せ者だ。メーカーも使えない。ロック機構のあるケーブルリリースを使ったバルブ撮影。北極星は海側、つまりここからだと言わんのだ。星の軌跡は新都側からこちらのお山に流れる。フィルムは400のモノクロだけど、露出は完全に経験とカンだ。

「リバーサル・フィルムを持ってくれば良かったかなあ」

「EFのフィッシュアイが欲しいとは言わんのだな？」

「対角魚眼って言ってもAPS―Cだね。それならμ―IIにモノクロを詰めて友達を撮ってるほうが面白いよ」

「ま、それが写真の基本だ」

それは何かというと、単焦点のコンパクトカメラに白黒フィルムを入れて、お弁当の最中や廊下で談笑している場面などなど、ありきたりな何気ないところを写させて貰うことを指す。いわゆる本当の意味でのスナップ撮影だ。

期間限定のそこに通う学生だけに許される、特殊なスナップとも言



える。ただこの場合に限り、オートだ。でもそういうカメラなので許して欲しい。そしてこれを現像して、ヤスリで削った特製のネガキャリアに挟んで、13cm×18cmのカビネに2cm程度の白フチを付けて焼き付ける。それを後日被写体になってくれた人に、お礼を兼ねてプレゼントするのだ。

携帯電話のカメラ機能で画像を交換したり、レンズ付きフィルムの上版カラー写真しか知らない級友たちは、白黒の大キャビネで手渡される、余白が多く細く滲んだ黒フチにたいてい驚く。またその物珍しさやモノクロならではのディテールにシビレて大いに感謝してくれる。

特にイ○フオードの無光沢で焼くと靚面だ。額に入れて飾っていると云ってくれた人も多い。ただ、プリントが貰えるからとコンパクトだとホイホイ写ってくれ、学園の記録や写真展への応募を目的とする写真部の一眼レフが煙たがられるという、困った現象が起きる事もある。言葉は悪いけれど、要は餌付けになってしまっただよね。

#### 閑話休題

バブル華やかなりし90年代初頭から、この2000年初頭まで、写りの良い単焦点の高級コンパクト・フィルムカメラが持て囃された。

ざっと挙げるとミノ○タ TC-1、ニ○ン 28Ti、35Ti、コンタ○クス Tシリーズ(T・T2・T3)、ラ○カ ミニルックス、CM、コ○カ ヘキサ、リ○ー GRシリーズ(GR-1、GR-1s、GR-1v、GR-21)、フ○ クラツセシリーズ(クラツセ、TX-1、TX-2)などなどだ。

レンズ交換ができるパノラマ専用機のTX-1とTX-2は、古くはラ○ツミノ○タCLやミノ○タCLE、近年ならコ○カ ヘキサRFと同じくニツチでとてもマニアックなカメラだ。ヘキサRFは社会人になったら、中古で良いので手に入れたい。だってこれらもフィルムカメラが終焉を迎える今、ほとんどが終息しているからだ。そしてこれら高級タイプよりも少し手頃な、だけど写りはそこそこ良い、単焦点の普及型コンパクト・フィルムカメラがあった。

ペンタ○クス ESPIO mini、コ○カ ビックミニシリーズ(ビッグミニ、BM-201、BM-301、ビッグミニF、ビッグミニマーメイド)、京セ○ Tシリーズ(Tスコープ、スリムT、Tブルーフ)、オリ○パス μ、μ-II、○ジ ティアラ、ティアラII、リ○ Rシリーズ(R1、R1s、R10)にMF-1、ラ○カミニシリーズなどだ。

私はこの中のμ-IIとティアラII、それとMF-1を持っている。最初のμ-IIは発売の翌年、5年生の誕生日にお祖父ちゃんがプレゼントしてくれた。女の子らしく可愛いシャンゴールドだ。この35mmのF2.8は中々の写りで、世界中でヒットした。プロもプライベートで使っていたりする名機だ。

ティアラIIは中1のときに、実勢価格が随分と落ちたので自分で買った。こちらの色はシルバー。28mmF3.5と少しワイドなレンズが付いていて何かと便利だ。遠足もこれが多いかな？

MF-1は高校の入学祝いで叔母さんから戴いた。30mmF3.9と暗いのだが、使い勝手は良いし、限定的ではあるけれど絞り優先オートとマニュアルフォーカス機構があるところが良い。

電池がCR123とCR2に単3といった具合で共用できなかつたり、オートフォーカスが甘かつたり、周辺光量が落ちたりと欠点もあるけれど、モノクロ・フィルムを詰めると途端に楽しいオモチャとなる。実は一番使っているカメラがこの3台のコンパクトカメラだ。

余談だけど、うちの女性は皆んな鼻が良い。なので母の妹である叔母さんは、とある化粧品会社で調香師をしている。おまけに子供がいないせいか、随分と私は可愛がられている。それでこのMF-1とは別に、FM3Aまで買って戴いた。

当然ニューFM2の予備として大切に使っている。お祖父ちゃんもお父さんもその事は知っていて、触発されたお父さんもFM3Aを買った。お祖父ちゃんは中身がコ○ナだと言いつつ、散歩用と称してFM10を買った。この後中古でFG-20をMD-14付きで買っていった。今、MD-Eの中古を探しているそうだ。

このMDっていうのはモータードライブの事だけれど、私もニュー

F M 2にM D―12を着けている。高校生の女の子が別着けのモ―ドラでバシヤバシヤバシヤと撮ると目立ってしようがないのだけど、体育祭などではやっぱり便利だ。重いのと巻き戻しが手動なのが難点だけれどね。

撮影は午前2時に終えて、私と祖父は新都の家に帰った。ちなみに同じ町内の隣の番地に三枝さんの家がある。そこから駅前や冬木大橋に通じる大通りに出て、交差点を渡った角には蝉菜マンションが建っている。

氷室さんや美綴さんが住んでいるマンションだ。こう聞くと近いように思いかもしれないけれど、それぞれの家は結構離れている。地方都市だけれど、冬木市も結構広いのだ。

### 3、 1月31日と2月1日

翌31日の朝、またまた眠い目をこすりながら祖父のいれてくれたコーヒーに口を付けた。昨夜の撮影で寝不足と言うと叱られるので口にしない。当たり前だよ。

それに眠気と裏腹に心は浮いていた。今夜の現像が楽しみだからだ。いつものように練習上がりの佐伯さんと談笑し、階段を登った。

「あれ？ 今の……遠坂さんだよな？」

「うん。雰囲気違ったね。何かあるのかな？」

何かを決意した。そんな顔だった。

教室に入り席につく。カバンから教科書を出していると予鈴が鳴ってHRが始まった。そこへ廊下から声が聞こえた。

『だく！ チャイム鳴っちゃったぞ、由紀っちが遅いから』

『責めるな、蒔の字。由紀香には由紀香の仕事があるのだ』

『ごめんネ、蒔ちゃん。部室の戸締まりがあつたから』

『それはわかってる。責めてんじやなくてグチだ』

またあの子たちか。

『あなたたち！ 本鈴が鳴るから早く教室に入りなさい！』

C組のトラが吠えた。間に挟まったB組は本当にいい迷惑だ。だけどあの三人、というかクチの悪い蒔寺さんも、ああ見えて根はとても素直な人だ。きつと藤村先生に叱られてシユンとしている事だろう。そんなときのあの子の顔は、とてもフォトジェニックだ。

2限目を終えた私は一目散に教室を出た。このティーブレイクで、お手洗いと眠気覚ましのコーヒーゲット、そして食堂の食券を手に入れないといけないからだ。というのも、本日4限目は体育なのだ。先に食券を買っておかないと、定食が売り切れる。それは学生にとつて切実な問題だった。

当初の目的を果たし、無事3限目を終えれば、A組の女子がわらわらと入って来た。

「ほらほら、男子！ 早くAの教室に行け！」

蒔寺さんに追い立てられ男子が出て行った。彼女は全方位に敵を

作っていくタイプだな。そしてカーテンが閉められた教室で、私たちが女子が体操服に着替える。

この時私の前で着替えるのは決まって遠坂さんだ。これは春からずっとだ。このB組は珍しく学期ごとの席替えが無かった。なので私が彼女の目印なのかそこは知らないけれど、どうやら遠坂さんは一度決めた場所は替えたくないタイプらしかった。

でもこれは彼女の体臭もあると思う。一番香りのきついパヒュームだと無理があるので、オードパルフアンやオードトワレを愛用しているっぽい。そのような香水で誤魔化しているが、彼女からは薬品のような香りが微かにするのだ。暗室のあの香りとも少し違う。私も女の子なので自分の体臭には気を配っている。だからこそ気付いていても言わないし指摘しない。そこはお互い様だ。だけど遠坂さんはそういう薬品を使う何かをしている人なのは間違いない。

そして必ず私の真後ろで着替えるのが沙条綾香さんだ。遠坂さんとはまたタイプが違うが、彼女はメガネ美人だ。そして信じられない大食い。特にお好み焼きが大好きらしく、文化祭では弓道部が来店していたお好み焼きの屋台で、全メニューを制覇したという。

それをずつと焼いていたのが衛宮君だ。退部した人にやらせるのかと呆れたものだ。案の定間桐君がかなり怒っていたと聞いた。これは間桐君が正しい。だけど自分は手伝わない。そこで手伝うどころか、代わって軽々お好み焼きを焼けばイケてるのになあ。そしてその衛宮君の横でドレスを着て突っ立っていたのが間桐さんだ。

文化祭のミスコンにエントリーしたのだが、時寺さんとタイアップした振り袖の遠坂さんに惨敗した。あの子や衛宮君って薄幸な印象がある。写真に撮ると露出は合っているに、アンダーに見えるのだ。

ともあれ、この沙条さんは印象こそ薄い匂いが匂い立つ女性だ。それも青臭いというか青汁臭い。彼女は薬草やハーブに詳しいのでよく山に入ったりする。その移り香が残っているのだろうと話してくれた事がある。遠坂さんほど秘密主義ではないし、無理に自分を演じているのでもない。真剣なときは怖いくらいで、気を抜いているときはド

ジぼつかり。自然体が彼女の持ち味だ。

そんな仲間とグラウンドに出た。冬の体育はランニングが多い。今日もえつちらおつちらトラックを走った。沙条さんと三枝さんは足が遅い。けれど遠坂さんと蒔寺さんは変わらない。私は氷室さんとどつこいだ。

汗もかいたが、ふくらはぎが痛い。運動不足だなあ。持参した消炎鎮痛スプレーを一吹きして、アトマイザーに少量移したコロンを振り掛けてから制服に着替えた。

『三田村さん、いい香りね?』

『ええ、調香師の叔母に戴いたんですよ。私の名前は『きょうこ』ですけど、このコロンは同じ字で『あんず』という名前らしいです』

『特製なの?』

『はい。叔母が薬品臭い私にとって』

『へえ〜』

これがたぶん遠坂さんとの初めての会話だ。1年の時も隣のクラスで体育が一緒だったのだ。この時に確か写真部だと話したと思う。そして私も鼻がよかった。だから遠坂さんの香りにすぐに気付いたのだ。

いつもなら何かないかと校内をウロウロするところだけれど、本日はまっすぐ家に帰った。昨日の現像をしたかったのだ。私服に着替えたならそくさとエプロンを掛け、ダークバックにピッカーでベロ出したパトローネと、リールやタンクを押し込んだ。

愛用のタンクはL〇Lのステンレス製35mm2本タイプだ。120(ブローニー)なら1本となる。暗室には同じメーカーやマ〇コというメーカーのステンレス製現像タンクが他にいくつもあって、その内私のが35mm1本用が2個に2本用が4個、そして4本用が2個だ。

私は慣れない頃、攪拌によく失敗したので、この4本用が苦手だ。お父さんやお祖父ちゃんは乳剤面を外にして、フィルム2本を背中合わせでリールに巻くなんて荒業を使う。こうすると4本用で8本も現像できるのだ。タンク2個だと16本だ。これのメリットは現像

液の消費量と時間が削減できるところだ。

部長としては覚えたい技術ではあるけれど、失敗したらせつかく撮影した労力がパーだし、今どき誰も自家現像をしなくなつた。二人の1年生部員にも教えてあげたけれど、一人はデジタルカメラのKissを買つたし、もう一人もフィルムのKissⅢでのカラー撮影が多い。そこもあつて今度の写真展応募に燃えているのだ。勿論狙うは白黒部門の金賞だ。

学園の場合、写真部は新聞部の一部門みたいなものだし、生徒会から依頼される記録撮影も多いので、部員が一人でも廃部にならない。けれど3年になつたら新1年生を二人は入れたいところだ。

そんな事を考えながらガチャガチャと現像タンクを振る。私はD—76でなくスーパードール派だ。液温は若干低く18度。それを9分で、ISO3200相当に増感現象だ。前浴、現像、停止、定着、予備水洗、迅速洗浄液、本水洗、水切り浴、リール巻きから乾燥まで約2時間。これ以上は早くならないなあ。

暗室の天井近くにフックがあるので、そこにフィルムを吊つて乾燥させる。フィルムチェックは明日だけけれど、パツと見た感じは悪くない。星の光跡が綺麗に写っている。

ただし、背景は暗い夜空なのでどのコマも素抜けにしか見えない。慣れない人が見ればギョツとするだろう。

日付も月も代わつた2月1日。休み時間に廊下で休憩していると、時寺さんたちの会話が耳に入った。

「今日、遠坂休みなんだな？」

「ネ？ どうしたんだろう？」

「風邪ではないか？」

ふくん、遠坂さんは休みなんだ。正解かも。今朝からどうも学園が『臭い(くさい)』から。佐伯さんは気付かなかつたけれど、私にはわかつた。

何ていうんだろう。甘い香り。美味しそうなそれだけでなく、直感的に毒を含むと思つてしまう身体に悪そうな香りだ。だから『匂い(にお

い)』でなく『臭い(におい)』。イメージとしてはウツボカズラの壺の中の蜜。あんな感じ。

そんな悪い印象だったので、佐伯さんとの会話でも勘違いで済ませたのだ。

休み時間にお手洗いに向かうと、美綴さんと沙条さんがいた。軽くお辞儀をすれば、沙条さんが何かを言いたげな気がした。結局その日、何も話しかけて来なかったから気のせいかも。

何てことのない一日を終えてバスを降りると、遠坂さんが歩いていった。誰もそばに居ないのに、誰かと会話しているかのような独り言を話していた。勿論私は会わないように物陰に隠れた。

熱にうかされて夢遊病みたいに街中を徘徊している？ そんな風には見えなかった。明らかに遠坂さんは見えない誰かを案内するかのよう、目的を持って歩き会話をしていた。気になったのでポケットからムービーを取り出して撮影した。遠いけれど一種のクセだ。

家に帰ると早速乾燥したフィルムを、6コマずつにカットしてネガシートに収めた。ライトボックスの上でフィルムチェックだ。

「あれ？ 何これ？」

数コマゴミのようなものが写っているのだ。でもゴミじゃない。現像ムラでも乾燥ムラでもない。

特に気になるコマをキャリアに挟んで電灯を落として焼いてみた。薬品はフタ付きのバットで保管しているので、1〜2週間に一回のペースでしか作らない。なのでこうやってすぐに焼き付けできる。ここがお祖父ちゃんの家のお便利どころだ。

「杏子、帰つとるのか？」

「は〜い、今暗室」

「ああ、昨日の。試し焼きか。どうだ？」

「ちよつと待って。変なのが写っているの。定着に入れたら開けるから」

それで定着液に浸けてから、印画紙を密封して暗室のドアを開けた。

「これ、何だろう？」



それは夜空に流れる光のスジだった。

新都から円蔵山に向かつて流れる星のような平行な軌跡でなく、新都から柳洞寺に収斂している感じだ。

「まさか初の心霊写真？」

「増感現像をしたのか？」

「うん。現像ムラかな？」

「いや、何かが写つとるんだ。それは間違いない。肉眼では見えんが、僅かながらフィルムが感じ取れるもの……」

「れ、霊魂？」

「それはないだろう。けどな、杏子。些細な事でもよく観察しなさい。そこには必ず理由がある」

理由か。それはあると思う。問題はそれが何なのかだ。

「そして、いくら興味が湧いても追い掛けてはならんものもある」

追い掛けてはいけないもの？

「そうだ。それでなくともこの冬木は不思議なことが多いからな」

「不思議なことって？ 10年前の大火事みたいなの？」

「火事はたいがい人災だよ。あれも市民会館の漏電が原因と言われとる。だがな……」

そう言ってお祖父ちゃんは、暗室の作業机の上にある棚からポートフォリオを取り出した。

「お前も高校生だ。そろそろ良いだろう。これなんだが、絶対の秘密だぞ？」

私はうんと頷いた。それは六切の白黒写真だった。その写真には燃える街の空の上に、夜空より真つ黒な丸い穴が空いていて、そこからコールタールのようなものが垂れているのが写っていた。

「何、これ？」

思わず見たお祖父ちゃんの横顔は、怖いくらい真剣な顔だった。

「10年前に起こった大火事の真の原因だ。こんなもの誰も信じやしない。だから息子の恭司にも話していない。あいつは記者だからな。別口である程度の事は調べていたようだ。だけど上から箝口令が敷かれ、記事にストツプが掛かった」

「え?」

「その頃色々あったんだよ。つまり何かがあった。そして、それを秘密にしたい者が居たという事だ。それも報道機関や警察に消防などを抑えられる何者かが。そこで私なりにあれこれ調べた。それでわかった。この冬木では約60年ごとにこういう災害が起きている」

60年ごと……?」

「どうやって調べたの?」

「最初は新聞の縮刷版を図書館でな。それで70年前の2月にも起きている事に気付いたんだよ。この時は何棟か家屋が倒壊していた。それも線を引いたかのように真つ直ぐに」

「真つ直ぐ?」

「うむ。台風でも突風でもない。被害が真つ直ぐ一直線なんだ。それに変だと気付いた。杏子にわかりやすく言うと、あれだ……亀何とかってあれ。あれを真横に放ったような感じだな」

かめ〇め波か。なるほど。

「つまり……そういうわけのわかんない奴らが本当にいて、バトルしている?」

「いや、怪現象イコールバトルとは言えんだろう? それだと、そんなことができる超人が存在する前提になってしまう」

「そっか、そうだよな」

「そう、そうやって冷静な部分を、常に頭に置きながら考えるんだ。その後は神社やお寺で取材した。ああいうところにもそれなりの資料が残っていたりするからね。それで60年ごとという周期に気付いたんだよ」

ああ、なるほど。

「そして200年程前から始まっていて、10年前で4回目だということもわかった」

「4回目……」

「うむ。それでだ」

お祖父ちゃんはそこで一旦言葉を切った。こちらの呼吸を整えさせるためだと気付いた。

「これを見てごらん」

え？ 特撮？ そこには信じられないモノが写っていた。それはどう見ても怪獣だったのだ。

「勿論写真は見せておらんが、恭司は苦い顔で集団幻覚と言った。そしてこれだ」

今度は西欧の鎧に身を包んだ外国人の女の子だ。そしてその子は、とても大きな白い剣を握っていた。白黒なので本当の色はわからなけれど、光っているのだろう。これだと本当に特撮だ。

でも怪獣のスケールはわかる。写っている人影から見てもビルの7〜8階分はある。何本もの触手に覆われた不気味な姿。それはとてもリアルで……。

「その黄金の剣から光が出て、怪獣をやっつけたんだ。さっきも言ったように新聞によると集団幻覚だったとされている」

「じゃ、お父さんがお祖父ちゃんに話した箝口令ってこれのこと？」

「だろいな」

「お祖父ちゃん、この女の子が怪獣を倒したんだよね？」

「うむ。撮ったのは新都側の堤防の上からだった。その女の子以外にもっと色白な女性と黒髪の少年、それと2mはありそうな大男と2本の槍を持った男がいた。全員外国人だ。その大男と黒髪の少年は二頭の牛が引く、二輪のローマ風な戦車に乗って空を飛んでいた」

「まさか〜」

「な、まさかだろ？ けれど写真はこうして残っている」

河川敷に集う、鎧女の子と、色白な女性に少年。そして大男と槍を持った男性。別の写真には、怪獣のそばを本当に牛が引く戦車が飛んでいるのが写っていた。乗っているのは大男と少年、そして槍の男だ。少女は川の水の上を走っている……？

「その怪獣退治に自衛隊の戦闘機も来ていたんだが、やられて墜落した。それも新聞に載っていない。私はこういうときのカンが鋭くてな。撮るだけ撮ったら一目散に逃げたんだよ。それもあちこち迂回して。ま、これはヤバイなと気付かせてくれたのはこの男のお陰だ」  
それはライフルを構えてこちら側を狙っている男性だった。

「それを撮った瞬間に10mほど横にいた若い男性が撃たれたんだ。それで慌てて堤防の下に逃げたんだよ。けれど怪獣は堤防下からでも撮れた。それくらい大きかった。最初から話すと退職して暇を持て余していた私は、清水の舞台から飛び降りる気持ちでAIニツ〇ール400mmのF3.5Sを買ったんだ。それが嬉しくて、日も暮れようというのに堤防へ出向いたんだな。そこに突如怪獣が現れ、その五人が集い、怪獣の周りを牛の戦車が飛んで、水面を少女が走り自衛隊の戦闘機が2機飛んで来た」

話だけなら気が触れたのかと思うような内容だ。だけど写真はここにある。これは本当の事なのだ。

「そして、怪獣がしばらく消えた」

「消えた？」

「うむ。時間としたら10分ほどかな？ だから最初は幻覚と私も思った。というか思ったかった。だが怪獣は再び現れた。そのときに同じ堤防の上に居た茶髪の男が撃たれたんだ。最初は腹で、次が頭だった。だから堤防の向こうへ逃げた。けれど水面の上を走っていた少女が気になった。本当に水の上を走っていたんだ。そしてその子は何も武器を持っていなかった。それで恐る恐る堤防に這いながら上り、匍匐しながら河川敷が見えるところまで行った。そこで少女の持っていたそれが黄金の剣だったとわかったんだよ。それにその写真も変だろうか？」

黄金の剣……。

「へん？」

「露出だよ。夜なんだよ？ 幾ら400mmのF3.5でも、ここまでするくは写らないだろう？ けれどそれはその剣が光り輝いていたからなんだ。それで綺麗に写ったんだよ。仕事を退職していて良かったよ。プロから退いたアマチュアの自家現像だ。だから誰も咎めなかったし、誰からも妙な圧力を受けなかった。何より現場から速効で逃げたのが功を奏したんだろうなあ」

もう、私はパニツク寸前だった。本当にこんな特撮みたいなのがあつたんだ……？

「だから杏子。お前の撮った写真は、何が写っているのか私にもわからない。けれどそれは誰にも話しちゃいけないよ。気になるなら調べても良いが、危険な香りがする。だから誰にも……。それに私は、その繰り返しされる何かが今度は早く始まった、その徴候のような気がする」

私もそう思ったのだ。だからパニック……。ううん、怖かったんだ。この冬木で何かが起きていた。それも60年ごとに。そしてそれが今回も……。？

「杏子、危ないと思ったら、とにかく逃げなさい」

お祖父ちゃんはその言った。私は川の上で光り輝く剣を高らかに掲げる、少女のプリントをもう一度見た。それは凛々しく荘厳で……。

#### 4、2月2日

2月2日。学園に近づくと昨日より臭(くさ)い。一步一步近づくと一層臭いがキツくなる。

すると校門前で、中に入らず学園を睨みつける遠坂さんが立っていた。彼女も何か気付いているみたいだ。どういう事かわかるかと近づいたら後ろから肩を掴まれた。

「シツ、静かに。沙条綾香です。遠坂さんに気取られないようゆつくりと、下足室に入らず弓道場とは反対に」

そこで言われるままに反対へ歩いた。しまった。こういうカタチで来るのか。遠坂さんと沙条さんは同じ『ニオイ』があった。そこに注意すべきだった。

私たちは校舎の前を右側に曲がった。

「おはよう、沙条さん。どうしたの?」

私はいつも通りの表情と仕草で、いつも通りに挨拶をした。気にはなるけれど、彼女の目は私を心配する目だった。だからそんな風に装ったのだ。

「……い。そうだね……。彼女のあれは気合を入れてるんだよ。校門を一步くぐれば、そこからは『遠坂凜』だってね。その『儀式』を邪魔しちゃ駄目だよ」

「ああ……なるほどね」

間違いない。彼女は何かを知っている。そして私を守ろうとしてくれている。けれど、もう少しだけ聞こう。

「あのさ……昨日今日と学園が臭(にお)うんだけど、誰か薬品でも撒いたのかな?」

「臭(にお)い……。そうね、あの臭(にお)いはだんだん酷くなりそうな気がする。来週の今頃がピークかな?」

「……そっか。ありがとう」

「ううん。三田村さん、あなたは賢いね。だから、来週は休んだほうが良いよ」

「ん、ご忠告感謝」

そんな成り立っているのかいないのか不明な会話の後、私はすぐに下足室へ戻った。そこには衛宮君がいて、時々首を振ったりしていた。

いつもなら寝不足を疑うところだけど、この違和感を彼も感じているんだと思う。だけど沙条さんは邪魔するなど言った。『儀式』ね……。彼女は思っていた以上に、こちらに親近感を持ってくれていたみたい。なら忠告は守るべきだ。

下足室で上履きに履き替え、階段を登った。今度は踊り場で待ち伏せされていた。

「三田村部長」

「はい？」

1年生の佐久間悠子さんと新聞部の井上順子部長？ この組み合わせは珍しい。佐久間さんは我が写真部のホープで、自前のカメラを早々に買ったたりして秋から冬にかけてメキメキと腕を上げている次期部長候補だ。

そして新聞部の井上さんは私と同じ2年生で、友人と言って差し支えないだろう。ただし分類項目は悪友だけけれど。

「何かしら？ 井上さん」

「いや、毎年の事なんだけど。今年も卒業生向けの特集号を作るからさ」

「ああ、そういう時期だね。過去1年分？ それとも2年分？」

「いや3年分。と言っても全部じゃない。1年時は入学と宿泊オリエンテーリング。2年は体育祭と文化祭。3年は日常のスナップがあると嬉しいかな？」

「オリエンテーリングはその3年生が1年の時に撮ったのしかないよ？ ちゃんとしたのなら先生を通して写真屋さんに聞かないと」

「そつちも手配済みだけど、卒業アルバムで忙しいのか返事がイマイチで。だから差し替え覚悟の当て馬なんだけど、頼める？」

「コーヒー3日分で手を打つよ」

「……わかった。三田村が可愛がつてる佐久間を掴まえたのになあ。効果なしか」

「ミエミエだつづうの。それにもうじき佐久間さんも2年生だからね。あなたの手には乗らないって。ね？」

「はい。新聞部との付き合い方もご指導頂きましたから」

「ちえつ。じゃ、期限は2月4日で」

「明後日じゃない！ 忘れてたんでしょ!?!」

「悪い……」

「コーヒー1週間分だ」

「……了解」

これは今日明日と部室に居残りだなあ。

午前中の授業を終えた昼休みの食堂。お祖父ちゃんがお昼を外食で済ます人だったので、私も食堂派だった。何より好き嫌いがないので、日替わりの定食を選んでおけば悩まずにすむ。女の子としてはあまり良くないことだけれど、ササツと食べて校内を散策するほうが私には向いている。被写体を求めて歩き回るのが、休憩時間に於ける私の常だった。

券売機で買い求めた食券を握ってガヤガヤと列に並んだ。本日は『Aランチ』の列だ。係のおばさんに食券を渡し、お盆と箸と湯呑を受け取る。そして『Aランチ』のカウンターまで行き、おかずのプレートとスープとご飯を受け取れば、隅っこにあるお漬物コーナーで、お漬物のバイキングだ。

おっと、本日は柴漬けが出ているのをいち早く発見。一応Aが洋食でBが和食となっているが、そうでない日も多い。けれど無理はないと思う。

本日のプレートは唐揚げ4個とミニサラダ、そしてモヤシとキュウリの和え物が付いていた。どう仕入れてどう作れば、これが400円で提供できるのだ？

ご飯の大盛りや単品のスープにお味噌汁は50円。かけうどんなら150円で、トッピング付きなら200円から。ラーメンでも250円だ。なのでご飯とうどんという人もいれば、家からおにぎりやおかず少なめなお弁当を持参して、ラーメンとともに食べている人もいる。



お盆を持って席を探していると、珍しく弁当持参派の衛宮君がいた。向かいには美綴さん。ふうん、『シエフの気まぐれランチ』ねえ。『Aランチ』や『Bランチ』の定食じゃないんだ？ 変わったのを選ぶんだなあ。

何々……チキンライスに小さな唐揚げが2個。そこにハンバーグとソーセージが2本。付け合せはブロッコリーにニンジンとジャガイモ。ミニサラダとスープは同じだ。

ハンバーグは色合い的に、合い挽きに魚肉ソーセージを入れたカサ増しだろう。唐揚げも胸肉なのはわかってるし、ソーセージも業務用の安いものだと思う。それでも本日のこれは大当たりだ。しまった。あれにすれば良かった……。

対する美綴さんは二玉入ったラーメンに大盛りカレー、更にミックス・サンドイッチ……一日のカロリーをここで摂り切るつもりなのか？ 運動量の多そうな人だけど、ここまで食べるのか。凄いな。

授業が終わると私は家に電話を入れた。祖父に帰りが遅くなるかと連絡を入れたのだ。あいにくお祖父ちゃんは外出中のようなので、留守番電話にメッセージを残した。

それから部室で何時間こもったろう。暗室にある時計らしきものはたいていタイマーだ。なので壁に掛かっていたハズの時計を探した。やつと見付けた時計を見ると、止まっている。誰も電池を替えてなかったか……。

そこで私は一旦暗室から出て、広い方の部屋の時計を見た。あつちやく、何とそいつも止まっていた。これは部長たる私の怠慢だ。腕時計は着けないタイプだし、困ったなあ。取り敢えず外の様子を見ようと暗幕のカーテンを少し開けば廊下は真っ暗だった。

ダブルあつちやくだ。下校時刻は大丈夫だろうか？ また1年のときの文化祭前みたいに校門を乗り越えないと駄目かな。そんな益体もない事を考えながら廊下の窓から校庭を何気なく見下ろした。

するとそこには……何だ？ 何かとんでもなく早いものが動いている。片方は赤い不思議な服装。露出がアンダーになりそうな濃い肌色だ。もう片方は……青？ 早くてよくわからない。

うん？ あのコートの子は髪型から察するに遠坂さんかな？

あ、青いのが立ち止まったのでやっと見えた。何やら赤い槍を持っている。槍……。あれだ。10年前にも居たって奴だ。ヤバイ。私は部室に戻り、中から施錠しカーテンを閉め、部屋の電灯を消した。そして暗室に入って扉を閉めた。暗室の電灯は外部に漏れないからだ。

心臓がドキドキする。10分も経たずに誰かが廊下を走る気配がした。好奇心に負けて暗室から出て、部室の扉に耳を当てた。

『運がなかったなボウズ。ま、見たからには死んでくれや。死人に口なしってな……。運もチカラもなかった手前えの人生を呪って逝きな……。嫌なシゴトをさせてくれるよ……。このザマで英雄とはお笑い草だ……。わかってる、文句はねえよ……。』

ビュンとかシュツという風切り音の中で聞こえた声。その後もブツブツと、何かを言いながら声が遠のいた。去った……。？ 心臓が落ち着くのを待って、そくつと扉を開けて廊下を見た。

「さ、さ、さ、殺人事件……!? だ、だ、第一発見者!」

真ん前に学生服の男子がうつ伏せで死んでいたのだ。被害者の下は血の海だ。私は現場確保のためチョークを探した……。

アホか！ それより証拠だ。死体には触れられない。なら写真だ。愛機のμ-IIのストロボをオンにして、被害者を4〜5枚撮った。

はあく……。カメラを持っていると落ち着くなあ。これが何もなかったら悲鳴を上げて危なかったと思う。だって、ある程度落ち着いていなければ、階段から響く足音を聞き漏らしたろうから。

カンカンと足音が近づいて来る。これは二段飛ばしの駆け足だ。私は即座に部室に隠れた。

足音の人物がこの階に着た。足音の人が誰かに指示を出した。だけど相手の気配はなかった。残った人物は遺体を検分している様子だ。

『なんであんたが……。あの子がどんな……』

あのくぐもった声は遠坂さんだ。グラウンドに居たので、たぶん

そうかなと思っていた。そして廊下が一瞬真昼のように光った。何だ？ 彼女は何をした？ やがて廊下から気配が消えた。

扉の隙間から廊下を見ると遺体が仰向けになって呼吸をしていた。あ、でっかい宝石見つけ。あゝっ！ 起き上がった被害者がポケットに宝石を突っ込んだ。

なんて奴だと思っただけだけど、彼は清掃用具入れから雑巾を取り出して自分の血を拭いていた。律儀なゾンビだなあ。ちらりと見えたそのゾンビの顔は衛宮君だった。彼も何か居残り作業をしていて……ああッ！

もしかしてグラウンドに見に行ったのか……？ それで見つかったやつなんだ。あんな怪しい存在、普通は隠れて見ないか？ いや、隠れていても発見されたのか。

私は衛宮君がフラフラと帰るのを見送った。その後呼吸を整え、戸締まりをしてから家路についた……。一体全体何だったんだろう？

家に戻り食事を済ませた私はお風呂の中でも、ベッドに入っても今夜学園で起きた事を考えていた。あまりにも衝撃的だったので、お祖父ちゃんにも話せなかった。

衛宮君を殺したであろう男は、自分を『英雄』と言った。遠坂さんはその死んだ衛宮君を、何らかの方法で蘇生させた。赤い槍を持った青い男と、両手に剣を握ったアンダーな赤い男。そして遠坂さんは誰かに指示を出した。

微かに聞こえたワードは『アーチャー』。そうだ……その『アーチャー』に『ランサー』を追えと言ったのだ。となると衛宮君を殺害した犯人は『ランサー』という奴。きつと槍を持った男だ。

『嫌なシゴトをさせてくれるよ』……殺人教唆だ。つまり黒幕がいる。そいつは誰だ……？

そう言えばA組の文化祭の出し物が『英雄』に関するものだった。あれは女子が提案し男子が乗ったから決まったと聞いている。女の子が『英雄』。言い出しっぺは蒔寺さん辺りだろうけど、女子が団結したのは遠坂さんが賛成したからではないか？

何よりあの剣とか槍とか持った者たちは人間ではない。きつとファンタジー的な精霊か何かだ。それを使役して怪獣や悪い精霊と闘う。そしてそんな精霊を使役する方法を遠坂さんは知っているんだ。

彼女の家は地元によくある大地主……それって間桐も同じだ。わかった。それ自体が何なのかはわからないけど、ともかくその能力があるかないか。

きつとそれが間桐君にはなくて、妹さんにはあるんだ。だから養子なんだ……。

お祖父ちゃんに以前聞いたことがある。事件や事故でなくとも、死んだ人の名前は新聞に載る場合があるって。

なんて言ったつけ？ ふ……？ あ、訃報だ……。そうだ、こういうのは地元の名士なら絶対に載るんじゃないか？ 地方紙でもローカルな冬木の新聞だ。その10年前。そこに遠坂さんの親が載ってれば間違いない。

10年前なら遠坂さんのお父さんかお母さんだ。そして今が遠坂さんなんだ。理由はわからないけど、精霊を使って殺し合いをしている……。それが『儀式』……？ それでもって、沙条さんもその『儀式』に参加している？

いや……関係者っぽくはあるけれど、遠坂さんが敵視していない。となると……遠坂さんのような能力はあるけれど、参加していないってこと？ じゃ、他にも何人かいる？

そして精霊は全員外人っぽい容姿をしていて、何かしらの武器を持って……。

『見たからには死んでくれ』……なんて一方的でムカつく言葉だろう。逆だ！ あの男が衛宮君を殺す瞬間を撮っていたなら、大伸ばしにして駅前に張ってやる。こんな殺し合いの『儀式』か何だかが、罷り通るのがおかしい。なら、匿名での告発だ。そんな勇氣はないけれど……。でも……悔しい。

だって、先日的一家惨殺事件もそうだし、オフィス街のガス漏れ事故も怪しいと言えば怪しい。全部繋がるような気がする。

真夜中、家が揺れた。地震かと慌てて飛び起きた。

私の部屋は2階だけれど、電柱の外灯が近いのでカーテンを閉めないで結構明るい。それでカーテンを開ければ1階の屋根くらいは背の高さがある、どす黒い大男が暴れていた。

例の精霊だ。大きな石というか岩を削って作ったかのような剣を振り回している。その姿はまるで棍棒を振り回す黒鬼だ。ああ、日付が変わったからか……。

相手は青いドレスの上に白銀の甲冑をまとった少女……。あ、水面のあの子だ。

私は1600のフィルムをカメラに詰め、窓の隙間からSP90mmやお祖父ちゃんから借りているニューニッコール 180mm / F2.8を突き出し、教会のある坂を移動するまでに4本も撮った。

暗いけど街灯があるのでバツチリだ。ただし、やや遠い。けれど白銀の少女のかなり後ろに衛宮君と遠坂さんがいるのは撮れた。また、大男の後ろに銀色の髪を持った小学生くらいの子供がいたけれど、この子もしっかり撮れた。

きっと大男の精霊を使役しているのが銀髪の子で、白銀の鎧が衛宮君だ。遠坂さんの『アーチャー』は、ここから見えないところから狙っているのだろう。何故なら大男に時々矢が当たっているからだ。爪楊枝みたいに弾かれていますけれど。そして5本目を詰め替えようとしている時に皆んな教会側へ移動していなくなつた。

5、2月3日から2月7日

2月3日の朝。完全無欠なまでに完璧紺碧な睡眠不足だ。結局朝まで一睡もできなかった。何だあの黒鬼は。しかも遠坂さん、今日はあなたの誕生日だよ？

遠坂さんはミス穂群原のときに、豆まきの日が誕生日だと全校生徒に知られているのだ。だから私も憶えていた。そんな日に……鬼のような精霊と真夜中に相対するって、良いのそれで？

本日、学園は休みだ。けれど、私は新聞部からの依頼を片付けるために登校した。臭（にお）いは相変わらずある。日の高い時間に行つて、日のあるうちに帰ろう。もう、あんな場面に出くわすのは懲り懲りだ。

お昼頃。持参したパンを食べるために、ドリンクを買いに自販機まで行った。思わずポケットからカメラを取り出した。衛宮君とあの子だ。2、3枚撮つた後、話しかけてみた。

「衛宮君、こんにちは」

「三田村……。あれ？ 写真部でか？」

「そう。だからこっちは制服。そっちはお姉さんにお弁当の配達？」

「そうなんだよ、公私混同もいいところだ。参るよ、つたく」

『お姉さん』とは衛宮君たちC組の担任である藤村先生のことだ。藤村先生の家が、親の居ない衛宮君の後見人をしている。なので、これまでに数回こういう場面を見掛けていたのだ。

「そちらの方は？」

「ああ……亡くなった親父の知り合いだ。日本に遊びに来たんだよ」

へえ。お父さんの知り合いね……。つまり、以前はお父さんが精霊使いだつた？ うん、そんな気がする。だから最悪の場で衛宮君を救けられた。きつとそれだ。

『こんにちは。三田村杏子です。衛宮君のナイトですか？』

『え？ ええ。セイバーと申します。そうですね。シロウを護るために来ました』

英語で話しかけて正解だ。ナイトを護衛と解釈し直した。最初は

ギョツとしていたけれど。それと『セイバー』さん……ね。急いでいるみたいだから、そこで別れた。

夕方と呼ぶにはまだ早い午後2時。日のあるうちに、何とか新聞部からの頼まれ仕事が付いた。年度別のネガシート・ブックから、お目当てのネガを見付ける作業は昨日で終わっていた。なので今日は焼き付けだけだったので、1時には終わっていたのだ。

実際は午前中に焼き付けて現像し、水洗に回してからお昼にした。午後は水洗から上げて乾燥だ。暗室にズラツとぶら下げて本日終了。休み明けに回収して新聞部へ渡せばお終い。納期ピツタリ。コーヒー一週間分にプラスして『気まぐれランチ』をねだろう。

食材の買い物を済ませて家に帰ってから、昨夜のフィルムとμⅡに入っていたフィルムを現像した。乾燥に回してから晩ごはんの用意をしつつお風呂を沸かした。

「ごめんね、お祖父ちゃん。掃除機掛けてもらって」

「構わないよ。こうやって料理を作ってくれるだけでありがたいさ」

「お祖父ちゃん……」

「ん、どうした？」

「後で、暗室で。10年前の剣を握った女の子が居た」

「何だって？」

「それに、今日学園に来ていた」

「そうか……」

食後暗室で現像したフィルムを見せながら、私の推測も交えてお祖父ちゃんに説明した。

「つまり学園に、こういうのを使役する者が二人も居ると」

「そう。60年でなく10年で始まったから、子供の世代なんだと思う」

「そういう事だな。となると他に居てもおかしくはない。前回も2週間ほど終わっている。学園を休むか？」

「行けるところまでは通うよ。けど、一人にはならないし、危ないと思うったらサボってでも帰る」

「うん、それが良い。それとその使役者との会話は十分注意なさい」

「だね。この『儀式』の事も、撮影している事も話さないよ」  
お祖父ちゃんには友人が多い。だから衛宮と遠坂、そして間桐の家を調べて欲しいとお願いした。

2月5日。美綴さんが入院した。昨日部活帰りに襲われたそうだ。

どうも新都の繁華街をたまたま通りかかった沙条さんが襲われるのを、美綴さんが身を挺して救けたのだとか。そしてこれまたまたま通りかかった陸上部の蒔寺さんが、一緒に救急車に乗って付き添ったという。怪我也大したことがないようだし、何より命が無事で良かった。

このところ新都ではガス漏れ以外に、女性が襲われる事件が起きていた。犯行場所は繁華街の裏手や、誰も居なくなった夜のオフィス街。美綴さんと氷室さんの住むマンションがその辺りだ。

そしてさるスジ（新聞部の部長）からの情報によると、美綴さんと間桐君が部室で昨日言い争っていたらしい。となると……臭（くさ）いなあ。精霊を間桐さんから借りるか横取りした？ そんな気がする。あのいいカツコをしたがる見栄っ張りならやりそうだな。

待てよ……。学園が臭（くさ）いのは、あいつが何かを仕掛けた？  
だってアピールをしたい相手が何人か居るわけだし。確か遠坂さんにフラれたとかどうか……。

部活禁止で全校生徒が帰宅を促されたが、私は部室のロッカーに置いてある備品の中からシルバーのニコオートFT3を選んだ。ボディはこの他に、シルバーのニューFM2とFG-20、モータードライブMA付きキ○ノンのA-1とE○S-Kiss5がある。

これは別に私の好みではない。元から部にあるものだ。歴代の顧問や部員がコツコツと部費を貯めて買い揃えたのだと思う。純正レンズもニュー・ズーム・ニツ○ールの43-86mm/F3.5やAiズーム・ニツ○ールSの35-105mm/F3.5-4.5、Aiマイクロ・ニツ○ール105mm/F4.0くらいで、後はタム○ンやトキ○ーのズームが2本あるだけだ。



そこでE〇S—K i s s 5とEF50mm/F1.8Ⅱとのセットを、昨年私が寄贈したのだ。高校生がどうしてって？ そのフィルムカメラのセットが去年の写真展での金賞商品だったのだ。理由もある。中身が10Dと変わらないK i s s デジタルならともかく、この手の賞品とは思えないフィルムカメラなんだから。

そんなニコ〇ートFT3にA i マイクロ・ニツ〇ール 105mm/F4.0を着け、1600のフィルムを入れて校内を歩いた。目的は間桐君だ。カメラは保険だった。持っていると勇気が出るというか、安心なのだ。廊下ですれ違った遠坂さんが随分と怖い顔をしていた。彼女も間桐君が怪しいと思っっているのかな？

結局見付からなかったなので、帰るべく下足室に向かった。カメラは明日返せば良いだろう。すると突然女子の悲鳴が聞こえた。下足室の反対側のガラス扉の向こう――。

体育館と繋がる通路で、髪の毛の長い女が女子生徒を襲っていたのだ。ガラス越しだが幸い曇りも反射もない。ガラスを磨く業者さんに感謝だ。首に噛み付いて血を吸っている？ 私は下足ロッカーの陰から何枚も撮影した。やがて足音が聞こえたので下足室横のトイレに隠れた。

チラつと見れば衛宮君だった。そして数瞬遅れて、左袖を捲くつた遠坂さん。何だ？ あの左腕に浮かぶ、青白い入れ墨のようなものは？ 下足室から出て行ったので、再び陰から撮影した。後ろ姿だったけれど左腕を重点的に。

その後、時間稼ぎに部室に寄ってカメラを返し、フィルムを抜いて家に帰った。お祖父ちゃんと相談の上、私は翌日学園を休んだ。

2月6日。朝から嫌な予感がする。食事を作ったり、掃除や洗濯をして気分を誤魔化しているが、気持ちは一向に晴れない。

思い浮かぶのは昨日の髪の毛の長い女性。あれは絶対に使役者が命じて襲わせた。たぶん血液そのものではなく、人の精神力や生命力――  
――何かそういうのを奪って自分のエネルギーにしているんだ。そして新都で襲われたという事件。被害者は一様に心神喪失状態かつ

機能不全状態で、生命の危機にあるか死亡に至っている。

そこで考え付くのがそうする理由だ。あの精霊は自分で活動に必要なエネルギーが生み出せないのではないか？　そしてそれを供給できる能力を持つのが本来の使役者だ。だけど間桐君にそれはない。あの男、クスリでも注射しておとなしく眠らせられないものなのか。

調べ物に出ていたお祖父ちゃんが戻ったのは午後6時だった。

「今日、学園で大騒ぎがあつたようだ。救急車が何台も来ていて、職員や学生が病院に運ばれた」

「え!？」

「杏子を感じた何か……それが働いた結果だろう。それに気になる写真が撮れた」

以前みたいにお寺を訪れたお祖父ちゃんは、外国人の女性を撮っていたのだ。何でも柳洞寺に居候している、2年A組の担任葛木先生の許嫁だとか。

「あ。絶対この人も精霊だよな？　耳が精霊だと言ってるようなものだもん」

「だろうなあ。それとマウント深山であの小さな女の子を見掛けた。そっちはともかく、学園関係者で三人、いや四人だ」

何だそれ……何だか怖いなあ。明日も休もうかな。

「杏子、学園をしばらく休みなさい。最悪は転校も視野に入れるべきだろう」

「……そうだね。命あつての物種だもんね……」

2月7日。今日から学園が休校となった。子細は電話をくれた級友から聞いた。

やはり昨日、あの臭(くさ)い何かが発動したようだ。校舎内はガスの不完全燃焼に拠る一酸化炭素中毒で、グラウンドに居た人たちは美綴さんの事に対する心因性の集団パニックと寝不足が原因だったと彼女は話していた。それは絶対はない。だけど否定はしなかった。

学園が休みなら堂々と外を出歩ける。私はお祖父ちゃんと一緒に教会に向かった。遠坂さんのご両親のお墓がその墓地にあるとわ

かったからだ。これは確認だった。お祖父ちゃんが既に調べていて、ご両親というより遠坂さんのお父さんの享年が10年前だと判明したからだ。

冬木の教会は家から近い。すり鉢状になったバス通りの交差点から坂を登ると教会だ。この坂は見晴らしがとても良く、左手には海が見える。ただし右手は壁というか崖だ。この上が墓地だった。坂を登りきり教会の前まで行った。

「お祖父ちゃん、ここ冬木教会じゃなく言峰教会っていうんだ？」

「そう、それが正式名称だよ。今の神父さんのお父さんの代に建てられたものだそうだ」

「へえ〜」

するとお祖父ちゃんは教会の前の花壇に水をやっている、この寒空でアロハシャツ一枚の男性に声を掛けた。

「すみません」

「ん？ なんだい？」

振り向いた男性は長身で筋肉質だった。そして髪は青く襟足だけ長く伸ばして金属の環で髪を纏めていた。そして耳には細長い不思議なカタチのピアスをぶら下げていた。だけど私の頭はアドレナリンがドパドパだった。

『見たからには死んでくれや』

声でわかった。よく見れば瞳も血のように赤い。あの衛宮君を殺した槍の精霊だ。だけど10年前の男性とは違っていた。そうか、精霊は入れ替わるのか。

知ってか知らずか、お祖父ちゃんは墓地への道順を聞き、男性をスポーツマンだと見做して褒め称え、『槍投げが得意』と聞き出していた。

「オリンピックに出たなら応援しますよ」

「ツハハ。そうだな……ま、そんな時や頼むわ」

そんな言葉を引き出し、写真まで撮っていた。プロだ。

その後ご挨拶をして墓地に向かったが、広い範囲で見事なまでに破壊されていた。だけど目的の遠坂のお墓は残っていた。R. I. P.

は『Gracious Living』。優雅な生活？ あ、人生か……。遠坂さんのお父さんだなあ。だけどそれなら『Graceful Life』じゃないか？ 石屋さんがうっかり間違えた？

「杏子、こっちから出よう」

2〜3枚写真を撮った後、墓地の横手にある小路からバス停のある交差点まで戻った。滅多に誰も通らない石造りの階段は、お祖父ちゃんにはキツいだろうに？

「カンだよ。さ、さっさと帰ろう」

そうして私たちは家に帰りお昼を摂った。午後はお祖父ちゃんもまた自分で取材、私はコーヒーを楽しむために喫茶店に入った。新都の大通りから少し入った場所にある、『アーネンエルベ』という名の喫茶店だ。

このお店は色々な料理が注文でき、できないものはないと学生の間で噂のお店だった。案の定先客に何人か知っている人が居た。その中に、氷室さんと沙条さんが居た。

軽く挨拶をして異なる席についた。ちよつと贅沢をしてコロンビアのエメラルド・マウンテンを頼んだ。ここのは焙煎度合いが『シテイ』なので、やや酸味があり苦味がない。実に私好みなのだった。

「……つまりこの冬木に埋まっている何かとは……」

ん？ 何だ？

「ズバリ、米軍の仕業であろう？」

あ、氷室さん、ガスのほうから考えたのか。なるほど、ガスを発生する不発弾ねえ。太平洋戦争でそんなに使われたのか？ でも沙条さんはめっちゃ安心した顔をしていた。だろうなと思う。氷室さんもそうだが、沙条さんも基本優しい人なのだろう。

そして話し終えた二人がこちらに近づいた。氷室さんからの誘いで、美綴さんのお見舞いだった。その帰りに重要な相談をしたいという。何だろう？

## 6、2月8日からエピソード

2月8日。病院の面会時間に合わせて、病院前の喫茶店で待ち合わせた。来たのは陸上部の三人組と私と、氷室さんに頼まれて誘った新聞部部長の井上さんだった。

「あれ？ 沙条さんは？」

「ああ、綾香嬢は来週辺りまで忙しいらしい」

「へえ」

喫茶店を出て病院に入れば、三人はスタスタと階段を上がって行った。

「全部階段？ 緊急用にエレベーターを開けておくとか？」

「三田村さん、違うヨ。二階で階段の真ん前だから」

203号室。何と個室から移動し、8人の大部屋だった。蒔寺さんがいきなりカーテンを開けて、美綴さんを驚かせていた。良かった、思ったより元気そうだ。井上さんもインタビューみたいな野暮なこととはしない。今日の本番はこの後の『相談』だったからだ。なので、美綴さんにフルールのタルトを渡し、井上さんと二人でお見舞いなのか引き落としなのかよくわからない蒔寺さんと美綴さんのやり取りを眺めていた。

病院からのお暇後、私と井上さん、そして氷室さんの三人でアーネンエルベに入った。蒔寺さんも三枝さんも家の用事で帰った。

「氷室さん、三人で良かったの？」

「ああ。蒔の字も由紀香も私に一任してくれている。むしろ生徒会長が入院している今、必要なのは君たちのチカラだ」

先日の騒ぎで、柳洞君も入院していたのだ。

「で、何を？」

「ボランティアの炊き出しだ。まだ内密だが、来る2月11日に爆弾の撤去が始まる」

「爆弾？」

「ああ、地中に埋まった不発弾だ。その撤去による一時避難で豚汁やお汁粉ををだな」

「なるほど。避難される皆さんに配ろうと?」

「そういう事だ。ただ、情報は拡散不要。あくまでも私たちが有志によるボランティアだ」

「つまり、避難場所は学園?」

「と、もう二箇所だ。だが我々は学園生だ。このところ不穏な空域が流れ、街の人たちの表情が昏い。そこで少しでもな」

「じゃ、記事には?」

「記事は止めん。が、事実のみを数行でお願いしたい。写真も今後の参考になる記録の範囲で留めたい。あくまでも有志によるボランティアだよ」

氷室さんのお父さんは、現冬木市市長の氷室道雪氏だ。政治家の娘として黙っていられなかったのだろう。何より趣旨がいい。私と井上さんは大賛成した。

だけど、本当に爆弾があったとは……。いや……。世間の目を欺くために埋めた? 或いは発見された事にした? そんな気がする。市長がどこまで知っているかは不明だけれど、任期は現在二期目の半ばだ。一期4年なので、市長になられて6〜7年目だ。確か10年前はどこかの国会議員の秘書だったと思う。そして元々裕福だったので新都に何棟かマンションを持っていた。それがあったので、氷室さん母娘は東京からたまにしか帰らないお父さんを待ち続けられたのだ。

そんな訳なので、現市長は10年前の事を詳細に調べられる立場にはなかっただろう。が、今になって知ったとしても、とても公表できるようなものでもない。そこが政治の難しさであり、大人の難しさだ。結局、自分のお父さんにしても長い物に巻かれるしかなかったのだから。

なら、なおさら氷室さんからのこの提案は嬉しかった。皆んなで協力して何とか成功させよう。私たちにできることってこのくらいしかないのだから。

2月9日。炊き出しの道具を下見に行った。蒔寺さんはバレンタイン・チョコの仕入れだと思いついていた。いや、そういう時期だけ

どぎ、いくら何でも……。

大きな寸胴に餅つきの石臼や杵。そして餅米の蒸し器。結局関西風のぜんざいに決まり、買った道具を全部氷室さんの家というか、彼女のお父さんの事務所に配送してもらった。これは他の避難地区でも炊き出しを事務所の方の音頭で、ボランティアの方々が行うと決まったからだ。ただ、そちらは豚汁らしい。

「芋煮じゃねえのか？」

「汝は山形県民か？　そもそも芋煮は、初雪の降る頃に終えるものぞ？」

「だけどシヨベルカーで、でっかい鍋をグルグルしたいじゃんか。冬木にもそういう名物を作ろうぜ？」

「そうよなあ……」

芋煮は里芋の採れる宮城県や福島県でも郷土料理だ。確か山形が醤油味で里芋・コンニャク・ネギ・牛肉だ。里芋の肉じゃがに近い。宮城は味噌味に豚肉で、野菜も里芋だけでなくダイコンやゴボウにニンジン、そこにシメジや白菜に、豆腐やコンニャクも入る。具だくさんの豚汁系だと言える。そして福島は醤油と味噌をブレンドした、宮城風なのだから。ただ具も様々で煮物の発展系らしい。岩手にも芋の子汁などがあり、里芋で何かを作るのは東北全般の風習なのだろう。当然各家庭ごとや地域に独自の具材や味付けがあり、コダワリ方も半端ないらしい。それ故に激しく論争が起きるそうだ。それだけ愛される料理なのだと思う。

だから蒔寺さんの芋煮は却下だ。火中の栗を拾う愚行は冒せない。何より彼女には当日の着物提供と着付けをお願いしなきゃならない。そして明日、生徒会の会計役員に会って、テントの貸し出しをお願いしなきゃ。

2月10日。いよいよ明日が避難日だ。昨日退院した美綴さんに氷室さんが声を掛ける手筈となっている。私と三枝さん、それと陸上部や新聞部の数人が小豆や餅米の買い出し担当だった。

蒔寺さんは別働隊として、生徒会からテントなどを借りる申請を

行っていた。

「新都のモールじゃなく、旧商店街？　なんでここなの？」

「私もここはよく利用するけれど。三枝さんはここのアイドルなんだよ」

陸上部の人たちの会話だけれど、これは事実だ。お肉屋さんの前を通れば揚げたてのコロッケを頂くし、魚屋さんも八百屋さんも、今日は何が良いとかどれがお得だとかアピールしまくりだ。

結局小豆や餅米は当日朝に学園へ届けて頂く事となったが、消費税に配送料コミコミで当初の3割は安く上がった。恐るべし三枝由紀香だ。

おまけに彼女は顔が本当に広く、酒屋さんのお姉さんにまで立ち会いを頼んでいた。

「だって、調理師免許を持っている人が一人は居ないと。それにネコさんは藤村先生の親友なんだヨ」

知らないよ、そんな情報。けれど学園側の監督は、その藤村先生に氷室さんが依頼する段取りだという。それがあつての生徒会に蔦寺さんか。

この三人、人間力が高いなあ。私は今回の件での成功へ向けて期待を膨らませた。

だけどその夜に、氷室さんからの電話でショックを受けた。葛木先生が許嫁の人とともに失踪したのだ。あの人だ。あの耳に特徴のある人。

そうか。葛木先生もそっちの人だったんだ。遠坂さんの担任……敵同士だったのかな……。

2月11日。本日はいよいよ決行日だ。行政が爆弾撤去を行う間、私達は避難された人々に少しでも憩いをと、ぜんざいを振る舞う。

学園は校舎が閉まっているので、蔦寺さんの家の大きなワゴン車の横に衝立を立てて、そこで振り袖に着替えた。着付けは蔦寺さんのところのお店の人だ。成人式の着物は当店で買ってくれとかなりせがまれた。まあ、こちらもその積りだし、お祖父ちゃんとお母さんは



とつくに詠鳥庵で私の振り袖を注文してあった。

高校の2年生なのにつて？ 染め付けや仕立てがあるので、16歳の時に頼んだのだ。4年後の体型や、流行りの柄などを前もって読めるところが詠鳥庵が老舗たる所以（ゆえん）だ。そんな風に早々に注文してあった事を時寺さんは把握していた。

「や、三田村んちはとつくに注文が入ってるぞ。お得意様だ」

お店の人に恐縮されてしまった。それで髪を結う時、良い飾りを使つて下さった。

下準備を終え、餅米が蒸し上がる頃、人々がぞろぞろと現れた。皆んな、浮かない顔だ。中には佐伯兄妹の顔もある。あの沈んだ顔が少しでも良くなりますように。

お餅は美綴さんの通う空手道場の方たちが、どんどんと搗いてくれた。餅米を蒸す蒸し器とカセットコンロが追っつかないくらいだ。結局避難の方々だけでなく、近隣の方々も色々持ち寄り、私達がぜんざいを頂いたのは夜の7時を回っていた。この日、正門前の道路から見渡せる深山の街には濃霧が立ち込めていた。

そこでドーンという大音声が辺りに響いた。本当に不発弾？ だけど市の広報は放送しないし、携帯ラジオを持った人も首を振っていった。

8時になって避難が解除された。これはきちんと市の放送があったし、校門前に広報車が停まって、避難解除をマイクで伝えていた。後片付けを済ませ、着替えた頃にお祖父ちゃんのクルマがやってきた。時刻は9時だった。

翌、2月12日。お昼から皆んなで佐伯さんの家に行き、ゲームをして遊んだ。提案者は誰でもなかったと思う。佐伯さんの家の近所で、偶然陸上部の三人や美綴さんと出会ったのだ。

皆んな、同じことを考えていたらしい。お互いに意味深な含み笑いを浮かべて、佐伯さんの家のインターホンを押した。

そしてこの後15日未明の地震以外、何もなかった。後で知った地震による被害者は、間桐PTA会長ただ一人。学園が再開され、人々

が日常を取り戻す。お祖父ちゃんの言った通り、二週間ほどで終わったのだ。

2月の20日を過ぎた頃、私は沙条さんを喫茶店に誘った。

「詳しい事は聞かない。きつとあなた達には大切なことなんだと思う。けど、人々に迷惑が掛かるのはどうなの？」

「う……」

「沙条さん、信用して良い？」

「どういう意味？」

「あなたが信用できる人なら、ある物を渡す。それを使って欲しいの。そうして私は、彼女に封筒を差し出した。」

### エピソード

「師匠が言ってたよ。やがて神秘は人々の目に触れてネットで拡散されるって」

「そんなネットの前に、ここまでやる人が居たんだ」

「うん。私は彼女を護る。その上でこれを、セカンド・オーナーであるあなたの武器として時計塔に投げ掛けるよ」

「はあ……。神秘の秘匿、それそのものを交渉の武器にするのね？」

「うん。そしてエルメロイⅡ世先生をこちらの味方にする。それしかこの冬木の霊地を守る方法はないよ」

「だろうね。最悪取り上げられる事も考えていたから。あくあ、刻印ってここまで写るんだ？」

「だね。サーヴァントも……。マキリが潰えた今しかチャンスはないよ。」

「ええ、妹も帰って来た。聖杯戦争はこれで終わりよ」

「じゃ、師匠にそう報告しておくね」

「だいたい、いつくらいに？」

「正確には言えないけど、3〜5年で大聖杯の解体が始まると思う……。その時に、バーサーカーのマスターを救い出せたら良いよね」

「……そうね。あいつにはまだ言えないけど、可能性があるなら懸けるだけよ」